二

如何なる文化の階段に居る者にも、親が子を取られる悲しみは理解せられる。それが尋常一様の原因からで無しに、鷲にさらはれたといふに至つて、話は更に新奇を添へ、之を聽いた者は忘れず、又その深い感動を次々の人に語り傳へることが出來たのである。現代のニュウスがそれであるやうに、曾ては語りごとが是だけで完結した時代もあつたかと思ふが、後後は其上に若干の解說を附加し、又は理由を尋ね結果を問ひ究める等、餘分に人間の智能を働かせることが普通になつて、說話の構造が追々と複雜化して來て居る。鷲の喰ひ剩しと謂つて友だちが嘲るので、不審に思つて親に問ひ、始めて自分の運命を知つたといふもの、或は後に學問をして名僧となり、年を經て故鄕の母に再會したといふやうな、新たな後日譚がいつとなく考へ出されて、次第に今日の文藝といふものに近くなつて行くのである。始めてさういふ新しい空想を胸に描き、もしくは二つの別々な言ひ傳へを、結び合せたのは何人であらうか。どこでどういふ場合に其變化が起つたらうか。それはまだ解決し得ない興味ある問題であるが、少なくともその說話は旅行をして居る。新舊何れの形態に於ても國の內に分散し、たつた一つの土地でしか知られて居ないといふものは殆と無い。隱れた運搬者のあつたといふ證據かと思ふ。

たとへば鷲に子を取られた母が、悲しみの餘りに鳥になつたといふまでの話は他にもある。廣文庫に抄出してある『溫故日錄』といふ書物は、まだ私は見たことも無いが、是には作州のつるぎ山といふ山の中で、相見乙人なる者の妻、背に負うた兒を鷲につかみ去られ、ハヤコハヤコ(早來)と喚び死に〻死んで鳥になつた。それがはこ鳥といふ鳥だといふ話が出て居る。はこ鳥はたしかに今の郭公のことで、其鳴聲を「早來」と聽いた例は、此書以外にも色々のものに見えて居る。或は女が山路を日の暮れ方に、幼な子を負うてあるいて行くと、頻りに早來と鳴く鳥の聲が聽えて、其兒の魂はいつの間にか喚び取られて居たといふやうな、寂しくも又神秘な言ひ傳へもあつて、鷲に取られたといふ形ばかりが、古くから分布して居たのでは無いといふことがよく判る。つまりは二つの有名な話が何かといふと結び附いて、一

續きに語られる傾向をもつて居た、痕跡と見て誤りはなからうと思ふ。

人が本地物と呼んで居る中世の說話文學なども、必ずしも遠く淵源を異國に求めるには及ばない。あんまり簡單だとか、それだけでは曲が無いとか、とにかくに物足らず感ずる者が多くなると、幾分の無理をしてゞも二つ以上の話を繋いで、或程度の長さと變化とを作り設けようとするのは、初期の至つて素朴なる技巧だつたらう。其上に思ひ掛けない非凡な出來事を聽いて、人の感動の强く濃く深く、他のあらゆる雜念を振ひ落し、純一な心の狀態になつて居る際に乘じて、次の大切な敎へを說かうとすることは、わざ〳〵よその國から學ぶまでも無く、多くの民族に共通な大昔以來の習はしであつたとも思はれるのである。鷲に空中を運ばれて命を全うしたといふやうな出來事は、いかに草昧の世にでもさう度々は起らなかつたらうのに、今なほ結末の若干の差異を以て、廣く世界の國々の話題となつて居たのも、言はゞこの接木の臺として似つかはしく手頃であつた爲に、後々の用途が多かつたから保存せられたらしいのである。奧州海岸の或舊家では、先祖が鷲の爪に攫まれて、絕海の孤島から脫出して來たと、傳へて居る例を聞いたことがある。伊豆の三宅島でも伊豫國の或豪士が、我子を鷲に取られて其跡を追ひ、終に此島に渡つて來て神になつたといふことが、神話のやうにして久しく語られて居り、それと半分以上似た話は、たしか又福島縣の山間の村にもあつた。良辨僧正の生ひ立ちといふ類の物語も、事實でないと同樣に又獨創ですらもなかつたのである。搜せば類例のどちらが先とも言へないものが、まだ〳〵澤山に見つかるかも知れず、或は是からでもなほ新たに生れるかも知れない。たゞさういふ中では鳥に兒を奪はれて、その母が又鳥となつたといふのが、配合の技術としてはさう上乘のものではなかつたといふことは言ひ得られ、それから又是に片足脚絆の由來を取添へて傳へたものは、上總以來の土地ではまだ我々は知らないのである。果して關東の片隅の特產であるか否か、今後の採集を待つて決したいと思ふ。

三

鷲と全く關係の無い片足脚絆の昔話ならば、遠く幾山川を隔てゝさま〴〵の類例が分布し

て居る。北九州で採集せられた四つの話を比べて見ると、同じ一つの説話の變化といふよりも、寧ろこの部分だけを共通にした、別の話と見たくなる程の差異がある。口碑が次々と結合するものでなかつたら、斯ういふ現象は見られない筈である。例によつて今少し詳しく説明すると、

一、郭公といふ鳥の片足黑い理由として、筑前傳説集には次のやうな話を載せて居る。昔親一人子一人の或家で、其子が不意に居なくなり、親は一生懸命に尋ねまはつたが、精魂盡きて倒れ死に、其靈が此鳥になつて今でもなほ尋ねまはつて居る。脱ぎかけた脚絆を片方はまだ着けたまゝで、家を飛び出したので斯んな足をして居るのだと謂ふ。此話は糸島郡の雷山の麓に行はれ、又賣滿山でも此山の郭公は片足が黑いといひ、やはり之を説明する子を失つた狩人の傳説がある。即ち爰では他に同じ話のあることを知らず、この土地ばかりの故事として信じて居るらしいのである。上總のクラッコ鳥と可なりよく似て居るが、此地方で親といふのは母でなく父である。さうして狩人が二人の子を見失つて、鳥になつていつ迄も尋ねまはるといふ話は土佐にもあり、東北では會津の山村にもよく知られて居るが、それにはこの片足脚絆の部分は無い。脚絆を脱ぐといふと、外から家に還つて來て始めて愛兒の居なくなつたのを知つたことになり、狩人といふ點とは打合はなくなるのだが、實は此話の今なほ人を動かすのは、淋しい山の中でいつまでも同じ鳴聲をくり返して、そちこち飛びあるく容子が、いかにも大切なものを見失つて、捜しまはつて居るかの如く聞えるからで、それ故に又是へ片足脚絆の由來を附け加へるといふのが、拙でもあれば又新らしいことだとも言へるのである。

二、豐前京都郡行橋附近では、コンコンドリといふ鳥が片足に毛が無いと謂はれて居る。九州民俗學といふ一號しか出なかつた雜誌に其話は見えて居るが、昔この鳥がまだ人間であつた時に、親が大病といふ知らせを受けて、草鞋を片足だけはいて大急ぎで驅けつけた。それで今でも毛が無いといふのは、脚絆が草鞋にかはつてもやはり同じ系統と思はれるが、話は我々のいふ「雀孝行」、即ち雀と啄木鳥もしくは雀と燕とが、親の臨終に逢ひに來たといふものと近くなり、しかも倘親と子の別れを説くまでは一致して居る。安部幸六氏などに訊ねて見ないと斷言し難いが、このコンコン鳥は青葉木菟、即ち東國でポンポン鳥と謂ふものゝこと

とらしく、其話も亦後節に擧げるやうに、他の地方には相應にあるのである。

三、豐前民話集に採錄した築上郡の昔話、是は又明白に郭公のことになつて居る。昔惡い繼母が父親の留守に、子供を殺してそつと裏庭に埋めると、其土から竹が生えて見る〳〵成長する。其竹を伐つて造つた笛が、吹くと父戀しといふ音を立てたとある迄は、廣く我邦に行はれて居る「繼子の笛」といふ話の通りで、其次に片足脚絆が續いて居るのである。此地方の郭公は片足が白く一方の足の毛は無い。父が還つて來て股引の片方を脱ぐいとまも無く、我子の行くへを探しに出て此鳥になつたからで、カッポウと啼くのはその殺された子の名だと謂つて居る。

四、肥後の玉名郡でもカッコウといふ子が、やはり惡い繼母に殺されたといふ話がある。父が還つて來てもいつものやうに迎へに出ぬので、どこへ行つたかと尋ねると遊びに行つて戻らぬと謂ふ。まだ片足の脚絆を脱ぎもせずに、捜してあるいたが見つかるわけが無い。それでカッポン鳥といふ鳥になつてしまつて、今でも我子の名を喚んで鳴きまはつて居る。此鳥の一方の足だけに毛が生えて居るのは、脚絆を取るひまも無く飛び出したまゝだつたからと謂ふが、其カッポン鳥を郭公とは又別の鳥のやうに考へて居るらしいのは、多分は話になつて外から運び込まれた爲であり、或は又現實の郭公に、さういふ毛の特徴を認め得なかつた爲かとも思ふ（昔話研究一卷四號）。

四

果して鳥類に右左毛の色を異にした足をもつものがあるかどうか。そんな問題まで考へる必要が無いのかも知れぬ。現に他の土地にも類例が至つて多く、郭公の鳴聲を説明したのにちがひない話でも、是に片足脚絆の一條が結び附くと、それをカッポン鳥だのクラッコ鳥だのといふ名で呼んで、別にさういふ鳥が居るもの〻如く語ることになつて居たのは、乃ち又普通の郭公には、氣を付けて居てもさういふ足の特徴を認めることが出來なかつた爲とも考へられるからである。豐前で青葉木菟かとおもふコンコン鳥に、同じ片足草鞋の話があつたやうに、全く異なる鳥に此話の附いて居る例が他にもある。たとへば山口縣の周防の大島

で、「長吉來い」と鳴くといふ鳥などもその一つで、長吉は父が山に行つて居る留守に殺された。父が還つて來て長吉はと問ふと、お前の還りが遲いから山へ迎へに行つたといふので、やはり脚絆を半分脱ぎかけて捜しまはり、鳴き死に〻死んで此鳥になると言はれて居る。或は「幸吉來い」と謂つて居る土地もあつて、五月の頃氏神さまの森へ來て鳴く鳥だといふから、多分耳木菟のことだといふのは本當であらう(口承文學一〇)。木菟や梟の類ならば、愈〻以て足がどういふ風になつて居るかを、見究めることは出來ない筈で、つまりは實際の觀察から出た話ではなかつたのである。

廣島市の附近では、梟は「要七來い」と謂つて鳴くといふことが、『安藝國昔話集』に出て居る。要七の母はたつた一人の大事な兒が、夕方遊びに出たま〻見えなくなつたので、捜しまはつてとう〳〵氣が狂ひ、死んで梟になつたといふ話である。是は右の足に黑い足袋、左の片方には白い足袋を穿いて居た。それ故に今でもこの鳥は右左ちがつた色の足をして、要七來いと鳴いて飛びまはるのだといふ。白黑の足袋といふ珍らしい一點を除けば、この話は實によく全國に行渡つて居る。さうしてその數多くのものを比べて見ると、結局は鳥は何鳥ときまつたことは無く、たゞ人間が最愛のものを奪はれて、歎き悲しんで命を終り、魂が鳥に化して永くさまよひあるくといふことを、最も判りやすく說かうとするのが目的だつたやうに思はれる。從つて又同じうらさびしい一つの節で、同じ言葉を際限も無くくり返す鳥、殊に晩方から宵にかけて、里近くを鳴きめぐる鳥が、說話の主人公として迎へられたものらしいのである。說話が成長し又複合する傾向を具へて居なかつたら、是だけの變化と保存とは期し難かつたらう。つまりは我々の祖先は靜かに鳥の擧動を觀察する能力と、時と同情とを兼ね備へて居たのである。

五

それにつけても是までは注意せられず、しかも隱れて大きな動機の働いて居たと思はれることが、今なほ數多く殘つて居るのには歎息せられる。親が子を失つて尋ねまはつたといふ話なども、不思議と相手は一人だつたといふものが多い。奧州では南會津のモナクナ鳥の話

が、『話の世界』といふ雜誌（大正九年六月）に出て居た。元七黑七は老いたる獵師の二人の子で、父を尋ねて山に入つたまゝ還つて來なかつた。父も崩れ岩に打たれて山中で死に、其靈がこの鳥になつて今でも二人の子の名を喚んであるくといふのは、少しばかり話が込入つて居るが、モナクナのナは親しい者を呼ぶときの添へ詞で、この鳥は郭公でも梟でも無いやうである。土佐西部の山中で白ベン黑ベンといふ鳥も、妻を見たといふ人も少ない鳥だが、是にも村毎に少しづゝちがつた說明がある。高木氏の傳說集に載せてある話では、惣六お千代といふ夫婦の者が、山で分れ〳〵に死んだといふことになつて居るが、是を親と子の悲劇として傳へた例もある。さうして白ベン黑ベンは其獵師の連れて居た二頭の犬の名で、それを舊主が鳥となつて喚ぶといふのが、前々からの言ひ傳へであつたかと思はれる。どうして獵犬が參加して居り、又その名が必ずクロであつたらうかといふことは、今はまだ解釋することが出來ぬが、九州の方では彥山の周圍、又山國川の谷合ひにも獵師鳥の口碑があつて、父を尋ねあるいた娘が鳥になり、「獵師來い黑來い」と淋しい聲で、今でも山中を鳴きまはると傳へて居り、それを又敷衍した春里長者の物語、或は井上巽軒、落合直文の孝女白菊の歌のやうな、色々の文藝の、追掛けて世に出て居るのを見れば、此話の評判のいかに高く、起りのどの位古いものであつたかも察し得られる。

豐前の小倉あたりでは、獵師こひし黑戀しといふのが時鳥のことだと、小宮豐隆氏などは言はれる。彥山で獵師鳥と謂つたのは又別の鳥であらうから、乃ち亦一つの說話が色々の鳥に、移り動かうとして居る例である。時鳥の前生には弟殺し、或は「おと喉つゝ切つちよ」などゝ、兄弟の鬪諍を說く話が最も多いが、是にも夫戀し母戀しと鳴くと傳へた例が、昔今に亘つて若干見出される。肥前五島の奈留島の時鳥は、「だん〳〵竹女、八やどけいた」と啼くといふが、其說明としては竹女は惡い繼母、八といふのは繼子の名であつて、父は不在の間に八の殺されたことも知らず、今なほ鳥となつてさう謂つて搜しあるいて居るといふ（五島民俗圖誌）。是などは明かに肥後玉名郡などのカッポウ鳥と同じであつて、たゞ其鳥がもう郭公では無く、且つ片足脚絆の挿話が落ちて居るだけである。

六

旅をして鳥の話を聽いてあるいて居ると、時々驚くやうな偶合を發見する。下五島の福江で人のよくいふのは、ヨシトッカッポウと鳴く鳥は昔は人であつて、二人の子を一ぺんに失つて悲みの餘りに鳥になつた。カッポウはその弟の方の名だつたと謂つて居るが、奈留島の人たちはヨシとトクとの二人の娘、汐干狩に出て波にさらはれ、還つて來なかつたので母が鳥になり、今でも其娘の名を喚け喚んで、ヨシトクと鳴いて飛びあるくといふ。日ノ島にも同じ話があつて鳥の名をヨウシトキ、何といふ鳥のことか知らぬといふ土地と、猫鳥のことだといふ土地とがある。九州西岸は一帶に、たしか青葉木菟のことをヨシカドリ、又ヨスケドリとも謂つて居る。多分はさういふ言葉で鳴くからかと思ふが、それにしては後に附いたカッポウが判らない。最初カッポウと鳴く鳥に就いて此話があつたのを、いつの頃にかヨシトクと鳴く鳥の方へ引移して、なほ痕跡を殘して居るのではないか。壹岐島でも昔貧乏な兄弟があつて、麥のみのる前に其弟は飢えて死んだ。それで毎年麥のよく熟した頃になると、出て來て「徳よい徳よい」と鳴く鳥がある。徳はその死んだ弟の名、鳥は麥うませ鳥又クォックォー鳥とも謂ひ、梟のことだと說明して居る(壹岐島昔話集)。是も或はまた一つ前の、話の名殘を留めて居るかも知れない。

廣島地方の白黑の足袋と謂つた話に、「要七來い」と鳴く鳥はヨシトクと似て居る。それよりずつと東へ來て、讃岐の小豆島で梟の話として傳へて居るのが、更に一段と五島奈留島のものと近い。小豆島でもヨシトクは梟だと謂つて居る。昔大水で二人の娘を無くした母が、氣が狂つて死んで此鳥に生れ替つた。それ故に今でも夏になると、毎晩のやうにくら闇の中を飛びあるいて、死んだ娘の名を喚んであるくのだと謂つて居る。聽いてそれからつかまへて比べて見ないと決められぬが、この梟といふのも多分は九州のヨシカ鳥であらう。最近に丸龜女學校の生徒たちが、集めて來たといふあの地方の昔話を見るのに、四國の本島にも同じ話は廣く行はれて居る。たゞその姉妹の名といふのがヨシとトクではなくて、テッチョウカッチョウと鳴いて喚ぶといひ、是に又例の片足脚絆の挿話が附いて居るのである。青葉木

蒐の聲でも聽き樣によつては、鋏よ勝よと聽えぬこともないか知らぬが、なほ最初　空想がもし自由なものだつたら、二人の娘の名をさうは附けなかつたらうと思ふ　即ちこの一つ背後にはやはり郭公の話があつて、それが迫々と眞夜中まで鳴く鳥へもつて往つて、衰れた深うせんとして居たらしいのである。伊豫の周桑郡には時鳥の啼聲をスッポウカッポウと鳴くといふ處があるが、是は郭公のことにちがひない。土佐の檮原でも郭公をガッポウと謂ひ、爰には又ガッポウの足には片方に羽が生え、他の一方に生えて居らぬといふ言ひ傳へがある。以前は片足脚絆の昔話が、專ら郭公に附いて居た證據かと思ふ。

七

斯ういふ悠長な話をする機會は、又と與へられさうにも思はれぬ故に、玆で今少しく郭公のことを附け加へて置きたい。この鳥の啼聲啼き方には、我々でも注意せずには居られないが、以前數も多く又鐵砲などゝいふものゝ少なかつた時代に、是が近くの樹に來て朝から日の暮まで、飽きもせずに鳴き續けて居た村の生活を考へて見ると、子供は勿論女でも年寄でも、其聲に何等かの意味が有るものゝ如く、想像し始めたのは寧ろ自然である。其上に我々は遠い父祖の世から、靈魂が軀を去れば高い處に行き、空を飛ぶものゝ形を借りて、故郷を訪れるものであることを信じて居た。盆に精靈蜻蛉の數限りも無く飛びめぐるのを見て、戒めて之を害せぬやうにして居る者が今でも多いと同じく、鳥を天馳せ使ひとして空の消息を受取つたといふ物語は、大昔このかた幾らあるか知れない。鳥の中には前の生が人であつたものがあるといふ話は、東洋一般かも知れぬが、日本には殊によく發達して居る。我々は單に大切にそれを記憶したのみならず、つい近い頃まで自らも話を考へ出して居たのである。さうして其暗示は多くの場合には啼聲であつた。鳴くといふことは聲を立てゝ人に告げることである。我々は之を聽いて空想したといふよりも、寧ろ告げられて其意味を覺つたやうに思つて居たのである。

時鳥は昔愛情の深い弟を、疑つて殺してしまつた兄の靈が、罪を悔やんで啼き悲しんで居るのだといふことは、ほゞ全國に行渡つた昔話であるが、其話はちやうど此鳥の盛んに鳴く

頃に、芽を出し次第に味が悪くなつて來る山の薯と、結び附けて說くものが最も多い。即ち豐州の麥うませ鳥の話のやうに、急いで薯を掘る季節になると、自分にばかりまづい所を食べさせたのかと邪推して、弟の腹を裂いて見た惡業を思ひ出すのである。ところが奥州の南部領だけでは、その殺された弟の靈も鳥になつて、ガンコガンコと啼いていつ迄も怨みを述べた。それが郭公といふ鳥だつたといふ話を持つて居る。ガンコは山薯のあは首の最もまづい部分のことで、私はそればかり食べて居たのになぜ疑つたといふ意味になるのだが、それはあの土地だけの近世の方言である故に、面白いけれどももう他の國には通用しない。

「口丹波口碑集」には閑古鳥は親に不孝な鳥で、親が背なかを搔いてくれと謂つても搔いてやらなかつた。それを親が亡くなつてから思ひ出して、後悔の餘りに「搔かう〳〵」といつまでも鳴いて居るのだといふ。如何にも子供らしい話だが、大阪府下の北河内郡でも、カッポウ鳥は親が背なかを搔けといふのをうるさがり、足で搔いてやつたので鳥になり、岩梨の實をたべて生きて居る。さうして後悔をして親の死後、「今なら搔かう」と鳴くともいふ（近畿民俗一）。鳶とか山鳩とかあまのじやくとかゞ、親の言ひつけのいつも逆ばかりするので、親が考へて山に埋めてもらひたいのを、わざと川原に埋めよと遺言する。それだけを親の言つた通りにした爲に、雨の降る前になると心配して鳴くといふ話、是は古くから全國に分布し、或は外國から採つたかと思ふ技巧のある作品だが、明かに其影響を他の一方も受けて居る。即ちカコウカコウの鳥の聲を聽いて、やはり親と子の本意無い死に別れといふことを思ひ出したのである。信州美麻村などのは更に田舍らしい趣向が添うて居て、この鳥は昔母のいふことを聽かぬ子であつた。母が背なかが痒いといふのを搔いてもやらなかつた爲に、崖にこすり付けて自分で搔いて居るうちに、母は谷底に墜ちて死んだ。それを悔い悲しんでやがて鳥になり、今でも搔かう〳〵と八千八聲まで鳴くといふのは（北安曇郡鄕土誌稿卷二）、やはり時鳥との混合であらうが、自分などには此話をふと思ひついて、惡太郎にして聽かせた老女の顏までが、あり〳〵と見えるやうな氣がする。斯ういふ何でも無いあどけない說話が、なほそちこちに分布して居るといふことは、殊に我々には意味深く感じられる。たとへば話を職業にして居る者が、旅して國中をあるいて居たにしても、是には手を掛けて遙々と運ばうとしなかつたらうからである。

八

鳥の聲を聽けばあの世の人を懐ひ、新たな追慕の涙を最愛の者の爲に灑ぐといふ風が、恐らくは何物よりも大きな力となつて、保存にも流傳にも役立つたのであらうと思ふ。現代の書いた文藝からは既にほゞ緣を絶つて居るが、有りふれたる繼子話の葛藤の中にも、なほ民間では小鳥の悲しい歌を聯想したものが多く傳はつて居る。日本のシンドレラでは雀が稗の實を拾ひ分けて手傳つてくれる。是を亡き母の許から送られたやうに、話して居る例も稀にはあつた。或は煮え立つ大釜の中で煮殺して、背戸に埋めると竹が生え、竹を伐つて笛に吹くと父戀しの音がしたといふ代りに、そこに鶯が來て同じ言葉をくりかへしたといふのもあつて、我々は之を「繼子と小鳥」といふ名で分類して居る。紀州の鞆淵村の昔話には、杣人に三人の子があつて後添の母に憎まれ、父の辨當を持つて山に行く途中、谷へ突落されて三人ながら死んでしまふ。それを少しも知らずに還つて來た父が、日が暮れてまで尋ねまはつて死んで鳥になり　今でもワコウワコウと鳴きつゞけるといふなども（土俗と傳說二）、明かに北九州の片足脚絆、又は「たん〳〵竹女」と同じ話であつた。しかもワコといふのが上流の家の息子の稱で、杣などする者の子のことで無いのを、もう知らなかつた人々の作である。

山へ食物を運んで行くといふ話は、山鳩の前生に就いてもよく語られる。炒粉を晝飯の代りに畠に居る父へ持つて行く途で、谷川の魚と戯れて其粉を皆魚に撒いてやつた爲に、父親は餓ゑて死んでしまつた。それを悲しんで其少年は鳩になり、テデェコォケェ・アッパツウダァ、「父よ粉を食へ母の搗いた」と鳴いて居るといふなどは、如何にも東北風な佗びしい空想であつた。多分山野遠く出て働く日が、殊に諸鳥の數しげく去來する季節であつたから、自然に空腹とか辨當とかを考へたのであらう。山村住民の觀察は驚くべく精確であつた。甲斐の昔話集にも郭公は前生が惡い繼母だつたといふ話がある。山の畠で麥苅をする日に、繼子に辨當を持つて來させて、下へ來ると上へ行き、上へ來ると又下へ行つて、何べんでもあるかせて居るうちに疲れて其子が死んだといふ。實際今でも郭公はさういふ擧動をするのである。早來といふ名も今は別種の說明のものしか傳はつて居らぬが、或は斯ういふ話の動機

にもなつて居たのかも知れぬ。とにもかくにも昔話はよく變化をした。さうしてその最初の感情のみは、常に人知れず下に流れて居る。

だから或は片足脚絆の起りなども、動物學の人たちがまだ氣づかない、何等かの特徴によつたものでないとは斷言し得ない。たとへば横から見た郭公の足の内側が殊に白いので、左右ちがつた足をして居ると思つたとも見られる。しかし是が轉じて色々の闇に鳴く鳥に移り、又は一方に毛が無いとも、足袋や草鞋の片方ともいふのを見ると、原因は或はもう少し古い所に存し、それを說明は出來なくなつても、まだ感情としては遺傳して居るのかも知れない。もしさうだつたら今後も氣をつけて、他の未知の地域を採訪する必要があると思ふ。私の考へて見たいのは、昔話の作者は、以前土地々々の素朴な兒女老人であつて、專門の說話業者はもと單なる運淩人に過ぎなかつたのが、追々に我手で加工もし製造もするやうになつたことは、ちやうど農產物の販賣なども同じで、日本では今なほ其餘風が殘つて居るのではないかといふことであつたが、それを討究する爲にもやはりこの片足脚絆のやうな、不可解なる趣向の分布して居る理由を知ることが必要である。二つあるもの〻一方といふことに、何か特別の深い意味があつたのでは無いか。行々子が前生は人の家の下郎で、誤つて人の草履片足を失つて首を斬られ、それを憤つて鳴くといふ話も考へ合せられる。この話は私なども七八つの頃に、父に敎へてもらつて永く記憶して居るのだが、父は或時又斯ういふ話もしたことがある。作書に據つたものか、自分でこしらへたものか。多分前者とは思ふがそれにしても古いものでない。郭公の話を書いて居て、頻りに其日の事を思ひ出すので、哀慕の餘りに爰に記して置く。曰く、

昔々おまへ見たやうな惡戲な兒があつたさうな。雀を竊竿で刺したところが遁がしてしまうたさうな。それから其あした寺小屋に行つて、大きな聲で手習の本を、「昨日は御取持下され忝けなく存じ候」と讀んで居たさうな。さうすると窓の外へ雀が來て口眞似をして、「昨日は御とりもち下され、片足毛無く候」と謂つたさうな。それでおしまひ。

鳥が物を言つたといふこと〻、片足に毛が無いといふこと〻の二つの點だけは、斯ういふたわいもない作り話の中でも、なほ新たに發明せられたもので無かつた。どんな小さな我々の一言一行にも、ぢつと見て居ると傳統の絲は曳いて居る。鳥は年々に生れ、人は年々に老

いるけれども、なほ其中を透してなつかしい親々は語つて居る。

（野島、昭和十五年二月）

食はぬ狼

村岡浅夫君の藝備『昔話の研究』に、昔々貧乏で活きて行く望みの無い男が、夜中に家の後の山に登つて、狼さんたち私〻食うて下されと言つて横になつて居る。北からも東からも西からも、どそ〳〵と音をさせて狼が出て來るけれども食はうとしない。早う〳〵と催促をすると、なんぼう食へ食へいうても象にや食ふ狼は居らんけえ、もういぬるがよいと謂つて、狼のマヒゲといふものを拔いてくれた云々といふ話が出て居る。双三郡作木村の、高等小學二年の女生徒の覺えて居たもので、惜しいことには少しの脫落がある。

狼の睫毛は寶物であつた。是を目にあてゝ人を見ると、心の人でない者の姿は獸にも見え鳥にも見えて、眞人間とのちがひを見別けることが出來た。同じ話は奥州の方でも、「雉の

一聲の里」など、いふ名稱を以て、女がこの狼の眉毛で未來の夫を探しあてたといふ、炭燒長者系の昔話が行はれて居る。或一地の住人の空想でなかつたことは明かであつて、是がどうして分布し又保存せられて居たかには、小さくない興味があるのである。

しかし私の今知りたいと念じて居るのは、別になほ一つ、斯ういふ賴まれても善人は食はぬといふ狼の話が外國にも有るものか、はた又日本だけの特產であつたかといふ點である。ほんの近年の文藝作品壺坂靈驗記にも、毎夜我夫の病眼を開けてもらはう爲に、信心に山に登つて行く貞女には保護を與へ、それを害せんとした惡者はすぐ食つてしまふといふ、畏ろしく判定力の進んだ狼の群が、あの健訟の弊を以て有名な地方に、住んで居たといふことが想像せられて居るのである。さうして是が又傳統ある我々日本人の、一つの自然觀でもあつたらしいのである。

狼が人の恩誼に報ずるの念に厚く、今の言葉でいふと義理固い獸類であつたことは、既に數多くの實例が記憶せられて居る。最も古くからあるのは咽に骨を立てゝ、それを拔いてもらつて禮に來た話、或は喧嘩をして居たのを仲裁してやつただけでも、非常に感謝せられたといふ話さへある。それから子を產んだ時に產見舞を持つて行つてやると、その重箱に鳥などをオタメに入れて、そつと返しに來たなどゝいひ、又は送り狼には門口の戸を閉てる前に、大きに御苦勞でござつたと一言挨拶をせぬと、怒つて家のまはりを荒して行くと言つたり、又は山中で狼の食ひ殘した野獸を拾つたとき、代りに少量の鹽を置いて來るか、少なくとも肉の一部分を殘して來ぬと、いつ迄も覺えて居て仇をするとも言ひ傳へて居るが、是等は何れも皆人間の側からの働きかけがあつて、其反應だといふのだからやゝ信じやすい。言はゞ我々の方にも少々の心當りがあつたのである。しかしそれにしたところが、他の獸にはあまり言はぬことを、どうして狼だけにはさう言ひ始めたものかゞ問題になる。所謂靈獸思想が特に狼に於て濃やかであつたことは、オホカミといふ一語からでも若干は推測せられるのである。

東京の近くでは三峯御嶽、遠州の春野山や山住神社、但馬で妙見山といふ類の信仰は、まだ多く知られざる小區域に、神職無しに保管せられて居るものが多いかと思ふ。尋常片々たる田畠の害鳥獸を驅除するといふことまでは、或は本能の過信とも見られようが、夜行く人

の中から悪人と善人、盗賊と番の者とを見定めて、一方だけを咬むといふことは、單なる主神の神德を實行するだけとは考へにくい。つまりは此獸の持前の力に、狗の嗅覺以上の何物かゞあつたこと、及び本來はさう矢鱈に人を食はうとするもので無かつたこと、この二つの信用がもとは遙かに今よりも高かつたので、狼の睫毛を目に翳すと、よくない人の姿が猫にも鳥にも見えたといふ昔話なども、それから蛟れて出たものとして、漸くその成立の事情が明かになるのである。

支那の近世の所謂小說の中には、雷電にさういふ超人的刑罰權を認めた話が多い。沖繩ではつい此頃まで、ハブは心のまつ直ぐな者には咬みつかぬといふ信仰が行はれて居た。以前は兩者の害が比較的少なかつたか、もしくは人に知られなかつた結果かと私は考へて居る。其害が現實に少しづゝ增加して來ても、なほ當分はよくも推斷せずに、昔のまゝの考へを持續することも出來たものらしい。一生何等の惡聲を聽かなかつた好々爺でも、雷に打たれて死ぬと何かの隱し事、天のみ知る罪惡があつたらうといひ、且つ又さういふものを見つけ又こじつけようとした。支那ではそれでも濟んだが日本の狼の害は、到底さうしては居られぬやうに、近世急激に增加して居たのである。過渡期の俗信は文藝と共に、どうしても混亂を免れなかつた。是を平靜に理解する爲には、事實を粗末にしない民俗學の活躍が、何と言つても是からは必須であらう。

（民間傳承、昭和十四九月）

（追　記）

宮本常一君が最近公けにした「吉野西奥民俗採訪錄」三九四頁に、やはり備後と同一の話が、大和吉野郡の大塔村にも行はれて居ることを記して居る。狼が人語して、「お前はあたり前の人間だから喰ひ殺されぬ。わしは人に生れて居ても畜生であるものだけ喰ふのだ」と語つたとある。その狼から貰つた一本のマヒゲを持つて、四國を遍路したといふ事實談のやうな形で語られて居る。

をまに受けるとはおろかなことだ。わしはこの間から乘鞍の麓の澤上の長吉の屋敷の杉の樹の下に、金銀が埋まつて居るといふ夢を見るけれども、夢だと思ふから氣にも止めないと謂つた。長吉はそれを聽いて、歸つて我家の杉の根をほつて忽ち大金持になつたといふ。

G. L. Gommeの著、Folklore as an Historical Scienceの卷頭に掲げられた一話は、この正直な炭燒を a pedlar(行商人)に、豆腐屋をたゞの一市民に、高山の味噌買橋を London Bridgeに取替へれば、九分五厘まで同じものである。英國の方では乘鞍麓の澤上の代りに、Norfolk州のSwaffhamと、Yorkshire州のUpsallとの二地に此話が傳はり、現に其長者の建立したといふ寺もある。さうして前者には二百八十六年前からの記錄があり、後者も大分久しい口頭の傳承があつたらしい。ゴンムは英人だから、倫敦橋の有名であつた點に重きを置いて說いて居るが、さうすると日本の飛驒高山の味噌買橋はどうしたといふ疑ひがいよ〳〵小さな問題では無くなるのである。

それよりも更に大きな問題は、誰が如何なる方法で運んで、この地球の兩端とも謂つてよい二つの國に、共通の昔話を分布せしめたかといふことである。偶合といふものには大よその限度があつて、是などは明かに同じ一つの話といふことが出來るからである。橋で埋れた財寶の所在を知つた話は世界的で、英國以外にもまだ數多くの例があることは、グリムの Kleine Schriftenの中にも色々比較がしてあるさうだが、夢の交換を中心にしたものが他にもどれ位あるだらうか。私は此本を持たないからまだ受賣することが出來ない。日本の文獻で是に近い話は今昔物語に、占者が死後に今一人の占者の來ることを豫知して、それまで財寶を置して置くといふのがあるが、是は又支那のものらしい匂ひがする。橋で運に行き當つた話は、捜せば日本にもあり、夢に金銀の所在を見つけて、友人が脇に居てそれを知つたといふのは、蜂の話となつて幾らも國内に傳はつて居るが、二者が斯ういつた形で結合したものは、この味噌買橋の話が私たちには始めてゞある。

一番無造作な想像としては、初期の英米の宣教師などが、覺えて居て此話をして聞かせたといふこともあるが、恐らく彼等のロンドン橋を、味噌買橋とは飜案しなかつたらうのみならず、別に今一つの反證といつてもよいものがある。英國では比較的遲く筆錄せられた異傳に、更に一條の後日譚が附いて居て、其分は丹生川村には傳つて居ない。行商人は村に歸つ

味噌買橋

飛驒の高山に斯ういふ名の橋が今でも有るかどうか。いろ〳〵捜して見たが少なくとも書いたものには無いやうだ。誰か年寄などで記憶して居る人はあるまいか。尋ねてもらひたいものである。澤田博士の續飛驒採訪日誌の附錄で、最近に集められた丹生川の昔話には、その味噌買橋の話といふのが出て居る。話者は婦人で母から聽いたといふのだから、新らしい輸入ではない。其筋をざつといふと、

むかし丹生川の澤上の長吉といふ正直な炭燒が夢を見た。高山の味噌買橋に行けば好い事があるといふ夢で、早速出かけて來て橋の上にいつまでも立つて居ると、そこへ橋の袂の豆腐屋の親爺が、遣つて來てどうしたと尋ねる。長吉の答へを聽いて豆腐屋は大いに笑ひ、夢

をまに受けるとはおろかなことだ。わしはこの間から乘鞍の麓の澤上の長吉の屋敷の杉の樹の下に、金銀が埋まつて居るといふ夢を見るけれども、夢だと思ふから氣にも止めないと謂つた。長吉はそれを聽いて、歸つて我家の杉の根をほつて忽ち大金持になつたといふ。

G. L. Gommeの著'Folklore as an Historical Scienceの卷頭に掲げられた一話は、この正直な炭燒を a pedlar(行商人)に、豆腐屋をたゞの一市民に、高山の味噌買橋を London Bridgeに取替へれば、九分五厘まで同じものである。英國の方では乘鞍麓の澤上の代りに、Norfolk州のSwaffhamと、Yorkshire州のUpsallとの二地に此話が傳はり、現に其長者の建立したといふ寺もある。さうして前者には二百八十六年前からの記錄があり、後者も大分久しい口頭の傳承があつたらしい。ゴンムは英人だから、倫敦橋の有名であつた點に重きを置いて說いて居るが、さうすると日本の飛驒高山の味噌買橋はどうしたといふ疑ひがいよ〳〵小さな問題では無くなるのである。

それよりも更に大きな問題は、誰が如何なる方法で運んで、この地球の兩端とも謂つてよい二つの國に、共通の昔話を分布せしめたかといふことである。偶合といふものには大よその限度があつて、是などは明かに同じ一つの話といふことが出來るからである。橋で埋れた財寶の所在を知つた話は世界的で、英國以外にもまだ數多くの例があることは、グリムの Kleine Schriftenの中にも色々比較がしてあるさうだが、夢の交換を中心にしたものが他にもどれ位あるだらうか。私は此本を持たないからまだ受賣することが出來ない。日本の文獻で是に近い話は今昔物語に、占者が死後に今一人の占者の來ることを豫知して、それまで財寶を置して置くといふのがあるが、是は又支那のものらしい匂ひがする。橋で福運に行き當つた話は、捜せば日本にもあり、夢に金銀の所在を見つけて、友人が脇に居てそれを知つたといふのは、蜂の話となつて幾らも國内に傳はつて居るが、二者が斯ういつた形で結合したものは、この味噌買橋の話が私たちには始めてゞある。

一番無造作な想像としては、初期の英米の宣教師などが、覺えて居て此話をして聞かせたといふこともあるが、恐らく彼等のロンドン橋を、味噌買橋とは飜案しなかつたらうのみならず、別に今一つの反證といつてもよいものがある。英國では比較的遲く筆錄せられた異傳に、更に一條の後日譚が附いて居て、其分は丹生川村には傳つて居ない。行商人は村に歸つ

て、夢に敎へられた樹の下を掘ると、黃金珠玉の充滿した壺が現はれ、其壺には讀めない文字が彫りつけてある。それを何食はぬ顏して表へ出して置くと、通りかゝりの一書生が、又は見馴れぬ猶太人が立止つて讀んで行く。「私の下にはもつと好い物がある」、もしくは「更に深く求めよ」といふので、急いで同じ場所を掘り下げて見たら、果して更に大きな財寶の瓶があつたとある。ところが此話も別に又一つ我邦にはあつて、是は英國のよりはよく出來て居る。土橋里木君の續甲斐昔話集に、東壺屋西壺屋といふのがそれで、此方は蜂の夢の話の續きである。二人の旅人の一人は覺めて居て、友の睡中の魂が蜂の形になつて出て行つて、金銀の在りかを突留めたのを見た。友が其爲に大金持になつたことを知つて、訪ねてその寶の壺を見せてもらつたとき、何心無く壺の裏をかへして見ると、「都合七つ」といふ文字がそこに書いてあつたといふ。それを二人で分けて二軒の長者が、軒を竝べて榮えたといのは心地よい話だが、この日英兩國の挿話も、兩種別途のものではあるまいと思ふ。

是から考へて行くと、少なくとも以前今少し長く變化のある形が、この味噌買橋の昔話にはあつて、飛驒へはやゝ切り詰めた話し方で入つて、人心を捉へたものゝやうである。さうして魂が小さな蟲の姿になつて、鼻の穴から出て遠くへ夢を見にあるいたといふ話も、類を同じくする昔話として、混同して記憶せられたことがあつたのかと思はれる。飛驒の澤上（サウレ）を發した丹生川の谷あひの流れが、乃ち倫敦橋下の水だといふ證據にはならぬまでも、我々のまだ省みない小さな事實は、屢ゝ彼等の爲の大切な解釋になる、といふだけは是で明かになつた。我々の智慧の大海は一續きに續いて居る。今はたゞそれが餘りにも茫洋として居るのみである。

（民間傳承、昭和十四年二月）

その二

飛驒の味噌買橋とほゞ同じ口碑が、西部獨逸には四つまでかたまつてあるといふ報告を、獨逸民俗學會誌一九卷三號（一九〇九年）で發見した。橋の名は爰ではコブレンツの橋、又マンハイム、ビルゲン、マインツの橋と、四つの土地に變つて居るが、其中で第一の話には幸運の賤の男を、新リンツェンベルグのエンゲルといふ家の主人とし、現に其土地には十六世紀

の初頭に建てたといふエンゲル家が殘つて居るから、此話が最も古く、他の三つは引移したものだらうと報告者は論じて居る。

編輯委員のヨハンネス・ボルテが之を批判して、同じ話は西暦一千五百年よりもずつと前からあるのだから、建物があるといふだけでさういふ解釋は到底出來ないと述べて居るのは、尤もな說である。グリムの小篇集以外にも、既に此比較を試みた學者が數人あり、更にボルテ自身の引用したものだけでも大分の數である。必要があつたら他日誰かに譯してもらふとして、爰には自分が問題にしたい點だけを紹介すると、先づ一千一夜譚中の一話に、バグダットの一富人、一旦其富を失つて懊惱する折から、深夜不思議の聲あつてカイロに往つて福運を得よと敎へられる。埃及では盜人と疑はれて入牢するが、彼の旅行の目的を聽いて役人が大いに笑ひ、そんな夢なら自分も三夜つゞけて見た。バグダットの是々の泉のほとりに、莫大の財寶が埋まつて居るといふ夢だとの話、其泉がちやうど自分の家の隣なので、大急ぎに歸つて來て掘り出して再び大金持になる。橋といふ一點だけを除けば全く同じ話で、是は十世紀終頃のアラビヤ人の著述等にも出て居るから、起りは最も古いといふ。二つの夢の行きちがひによつて、寶の所在を知るといふだけの話ならば、他にも古い話が東方には多く、又ボルテが多分同系統の言ひ傳へであらうと謂つて擧げて居る猶太人の一記錄では、旅行をするに先だつて賢人に夢を解いてもらふと、カッパドキヤへ行けといふ夢の告げは、二十番目の腰掛の下を捜せといふ謎であつたので、わざ〳〵出かけるに及ばず、早速に親の眼して置いてくれた財寶が見つかつたことになつて居て、此方はいよ〳〵今昔物語の占なひの名人の話と近くなつて居る。

話の要點が、つい眼の先に隱れて居る幸運を、わざ〳〵遠くへ出かけて敎へられて來るといふ所に在るものとすれば、根源はまさしく亞細亞大陸であつた。たゞ我々が特に興味を拋かずに居られぬことは、その出來事の舞臺を橋の上としたものが、シリア・アラビヤには全く無くて、歐洲の類話は悉く皆橋となつて居ることである。ボルテは丹念にも數十個所の實例を例擧して居るが、それは何れも我々が捜して見ることも出來ない本ばかりだから、受賣をしてもし方が無い。要するに少しでも名を知られて居る都府に架つた橋には、此話の無い方が珍らしいといふ程度なのである。其うちで最も古いと見られるのは、シャルル大帝の若

い頃の逸話奇聞を集めたと傳へられるKarlmeinetであるが、是には先づ巴里の橋が出て來る。亞剌比亞夜譚の方では埃及に出かけて、寃罪で牢に入れられて後に好い話を聽いたのと同じに、こゝでも夢の告げに巴里の橋へ行けば、苦と樂とを受けるだらうと敎へられてそこへ行くと、橋番の兵士が馬鹿なやつだと言つて、先づ棒で擲つて置いてから自分が見た夢の話をしてくれる。是一つから見ても十字軍の時代に、小亞細亞から持込んだ話の種であることが判ると、ボルテは謂つて居る。

それに反對する論據は現在はまだ一つも無いが、こゝに問題になるのはどうして歐羅巴では話が皆橋になつて居るかといふことゝ、寧ろ距離からいへば原產地に近い日本に、なほ且つ飛驒の味噌買橋があるかといふことである。明治初年の外人宣敎師が、譯して聽かせてくれたらうといふ想像は少しも根據がない。假に高山の町の人が知つて居り、又もつと堂々たる兩國橋とか五條の橋とかになつて居ても、私にはとてもさうだらうかとは思はれない。一つの解釋は此話の運搬が、少なくとも歐洲に於ては架橋土木の發達期に遭遇し、都會はもとより田舍の人々も、新たに架つた橋を評判にして居た際だつたので、話者が其中心をこゝに置いたのが、偶然にも大いに當つたのでは無いかといふことである。更に一歩を進めての想像は、橋が新らしい文化の表現であつた故に、是が占なひ呪なひの場處に使はれ、最も神秘を說くのにふさはしかつたので、話者も之を選び聽く者にも印象が特に强かつたのではないかといふことである。橋に伴なふ不思議話は日本なども決して乏しい方ではない。何れにしても、最初は單によその國の珍らしい昔話を、意識して移植したものであつたのが、餘りにあの橋の上でといふ條に、力を入れて說き又は聽いた爲に、終に其固有名詞と不可分になつてしまつて、鄰地に同じ話があるのを知ると、すぐに盜奪でゞもあるかの如く互に思ふやうになつたらしいのだが、斯うして多數の類例をならべて見ると、それはたゞ說明業者の技巧であつたことが明かになるのである。日本で白米城といふ傳說なども、變形の事情がよほど是と似て居る。

（民間傳承、昭和十四年四月）

（附　記）

武田明君の集錄刊行した『西讃岐昔話集』三五頁に、香川縣西部の「味噌買橋」が二つ發見せ

られて居る。その一つは京の五條の橋、今一つは話者の居村と隣村との堺の無名橋だが、夢を見てそこへ尋ねて行つて人に笑はれ、同時に其人から自分の村の或樹木の下に、寶の埋まつて居ることを敎へられた點は、飛驒のものと全く同じである。古くからのものとは多分言へまいが、假に說敎僧などが珍重してもちあるいたとしても、彼等は西洋の書物から學んだ氣づかひは無い。どこかに隱れてもとの種子はあつたのである。或は今にその出處もわかつて來ようも知れぬ。

次に高山の味噌買橋は、今でも此の地方の人たちの皆知つて居る橋の名で、表向きの名を筏橋といふ橋のことであつた。現在はコンクリート造り、その前は板橋、又その前は一本橋であつた。橋の此方に大きな味噌屋があり、對岸から買ひに來るのに、是を渡るのが最も便利であつたので此名がある。味噌屋とも言へないので豆腐屋にしたものであらう。

「壹岐島昔話集」

此集の興味は色々の點に見出されるが、あまり長くなるから序文には、たゞ卒直な讀後感を述べて置かう。特に面白いと思つた昔話がこの中に十ほどある。動物說話に於ては「かせ掛蚯蚓の由來」(八四)、是などは或は壹岐で生れたのかも知れぬ。少なくとも他の土地にはまだ之に近いものが無い。話の運びが自然であつて、しかも若干の智巧が加へてある。もとの形はずつと違つたものであつたのを、島の閑暇の多い人たちが、出來るだけをかしく話しかへたものであらう。時代は機織りの最も盛であつた頃と見てよい。

所謂本格昔話の中では、鶴の話(一一二)などが私には新らしい。鶴を助けて長者になつた話は、普通には鶴が美しい女房になつて來て、毛衣を織つてくれることになつて居るのだ

が、此方は鼠の穴に招かれた話(二九)の影響を受けて改作せられて居る。前者を「鼠の淨土」と呼ぶのが習はしだから、私は是をも「鶴淨土」と謂つて置きたい。此形は至つて古いもので、今昔には既に小蛇を助けて其家へ招かれた話がある。但しこの鶴の婆の方には、婚姻はもう說かなくなつて、元日から七日まで男を引留める理由を、積重ねて行く所に童話式の興味を求めて居る。職業的說話者の介在を推測せしめるものである。

次には一寸法師の系統に屬する豆藏の話(一二一)が、御伽草子と因州の五分次郎などゝの中間に立つゝのとして珍重せられる。プチ・ブーセの研究に苦心して居る西洋の學者たちに、早く知らせてやりたいやうな好い例である。彼等の意外とする說話の類似が、日本に數多くあることは此頃になつて判つて來たのだが、それが斯ういふ海島に見出さるゝに至つて、殊に學問上の意義は大きいのである。荒唐を極めた「手無し娘」の話なども、壹岐では川に洗濯に出て來た女(五四)となつて、もう餘程磨滅して居るやうだが、其同形は遠く地を隔てゝ、出雲と奧州とでもつと詳しいものが採集せられ、しかも一般に日本の例の方が說明は古い。無暗に南蠻貿易時代の、舶載とも斷定し得られぬのである。

それから問題となるのは寶蓑(一一四)、是も全國に行渡つて居る說話ながら、他で寶物を交換した相手の方を、狐と謂ひ又は樹上に憩うて居た天狗と稱して、大分化物退治譚に近づけて行かうとして居るのに反し、壹岐のは歳德神を欺いたことになつて居るのが非常に珍らしい。多分は機智によつて神の恩寵を博し得た話の、次第に滑稽化して來た路筋を示すものとして、後々重要なる資料となるであらう。それと稍似て居るのは河童と飴(六六)の話である。持つて生れた運勢は人力では變へられぬといふ前代の話し方を、後には誠に些細な方法を以て、左右し得た樣に說くことになつて、中心は次第に移り動いたのだが、しかも神の言葉を立聽きしたといふ點のみは、なほ最初のまゝで附纏うて居るのである。

ぼら賣吉五郎(一四〇)の話もよく變化して居る。是を一擧七頭の仕立屋の童話と同じものだと謂つても、ちよつと承知する人は無いか知らぬが、我邦では是が驚く程度に土地毎の改作を受け、薩摩の南端に行はるゝものゝ如きは、優に一冊の書卷をなすばかりに成長して居るのである。是には底に幽かなる反抗と皮肉とがあつて、必ずしも當初童男童女の爲に、結構せられたもので無いことは察せられる。話者が男であり、聽衆が壯年の人々であつた時代

が、島や海岸の作業團體に於ては、可なり久しい後まで續いて居た結果では無いかと思ふ。もしさうだとすれば此集の刊行は、特に笑話の發生を研究せんとする者に、有力なる資料を供與するものと言ひ得る。

昔話の分類といふことについては、山口氏はまだ心を勞して居られぬらしいが、今はもうその時期である。たとへば話を現在の形まで持つて來た者が、女性であつたか、はた之を職業とする人々か、乃至は素人であり又男子であつたかを考へた上でないと、是を手掛りとして上代の信ぜられた說話の、如何なるものであつたかを見出すことは出來ない。又それが出來ぬやうなら、今更斯ういふものを數多く竝べて見るにも及ばぬので、事情の懸け離れた一孤島の採集が、格別に價値ある理由も亦それからのみ說明し得られるのである。自分などの見た所では、此集の傳承者の三分の二以上が男であつたといふことは、島に笑話のよく發達してゐることゝ、偶然ならぬ關係があると思ふ。男は大いに笑ふ權利を持ち、又人を笑はせる任務をも負はされて居たからである。しかも其間に在つて、尙多くの繼子いぢめの話のやうに、終りの物悲しい涙小說が保存せられ、一方には又至つて罪の無い御伽話の傳はつて居たことは、少なくとも其保管に就て、島の女性も亦決して不熱心で無かつたことを證明する。たゞ殘念なことには他の地方も同じ樣に、總體に昔話は既に圓熟の期を過ぎて、採集が間に合はなかつた感じはある。前に掲げた手無し娘の例を始とし、皿皿山(七五、八三)でも食はず女房(八七)でも、牛方山姥(二二、三六)でも又天道さん金の綱(三二、八八)でも、折角殘つて居るのが今は皆破片で、單に斯ういふ分布が曾てあつたといふだけを、知らしめるに留まるのは是非も無いことである。

最後に私は此集を精讀することによつて、將來の採錄をどうしようかの問題に逢着した。昔話の地方的相違は、研究者にとつて一つ〳〵の意味はあるが、いつ迄もその一部分の變化によつて、同じ話を列擧して行くわけには行かない。簡單なる「魯か聟」や「おろか村」の話に於ては、今でも早我々はうんざりさせられて居る。爰にもさういふ笑話なら在るといふだけを、明かにする方法が欲しいものだと思ふ。長い古典的の昔話に於ても、出來るならば明確な名稱をきめ、代表的の一話を掲げて置いて、それと違つた部分のみを報告することにしたらどんなものであらうか。勿論幼少の頃からの親しみもあつて、誰しも我土地のものを古い

形と考へたがるであらうが、それにも亦おのづから限度がある。あまり短かく前後の切れたものや、中に繼ぎ目があつて二つ以上を結び合せたものなどは、寧ろ今一段と纏まつた形の話が、早く何處からか出て來ることを希望せしめる。我々の取扱ひ方は、どうしても二通りにならなければならぬと思ふ。即ち世間に有りふれた昔話、もしくは破片になつて居るらしいものは、簡略に話題と要領とを掲げて、その分布の實狀を明かにするに止めると同時に、一方特に珍らしいか又は大よそ完備して殘つて居ると思はれるものは、十分丁寧に其原形のまゝを保存するやうに骨を折る必要がある。壹岐のかちかち山(三一)は成程變つた型で、遠く奥羽の方には是と近いものが行はれて居るが、所謂標準御伽では、もう狸が爺に縛られるまでの經緯は說いて居ない。だから此話を實際話して貰つた文句のまゝに、記錄しようとした編輯者の用意には感謝する。たゞ同じことならばも少し粗末でもよいから、尙他の十餘篇の主要な昔話にも、其方法が應用して貰ひたかつた。たとへば文福茶釜の童話の一例、實伊と狐(一二七)といふ話なども、恐らく色々のをかしい問答があつたのであらう。他の地方に殘つたものは多くは破片で、是だけ筋の通つたのが實はまだ見付かつて居ないのである。是を他の色々の笑話類と一つに、小學校童話式の新文體に書改めてしまつたことは、如何にも氣遣はしく又惜しい感がある。壹岐に昔風の話好きが絶えてしまはぬうちに、殘りの部分をもう一度、別な方針によつて採集して貰ひたいものである。

（此書序文、昭和八年十月）

「島原半島民話集」

昔話研究の同志者として、著者關君と私とは、出來るだけ無我の心を以て、この集の後世に於ける價値を話し合つて見た。關君は以前は最も多く傳說に興味をもち、鄕里で少年の頃から聽いて知つて居ることを、それも變名などで折々公表するのみで、民譚は餘りにたわいが無いといふ風な考へを抱いて居たらしいが、一たび「桃太郎の誕生」の類の僅かばかりの暗示に由つて、卒然として二者の相關を看破し、この民間文藝の大いなる地下流の行くへを究むべく、特に便宜の多い或一つの淸き泉の邊に、生れて育つた自分であることに心づいたのである。さうして是は確かに學者が半生を捧げても、惜しくはない程の深い問題だと考へるまでになつて居る。今日の時節、諸國昔話のやうな茫漠たる民間の事象に、斯ばかり意を惹

かれるといふのは稀有の例である。私にも少しく心當りがあるが、多分は眠れたる家の遺傳の致す所であらうと思ふ。

話を聽きたがらぬ子供といふものは、それは尠いかも知らぬ。たゞ其中には幾通りかの種別がある。普通には次々の見聞の下積みにしてしまつて、種無く忘れて行く者が多いのに反して、妙に一ぺん聽いたことのある話をいやがり、胸に目錄を作つて其數の增すことを念ずる兒もある。斯ういふ兒は概して記憶がよく、成長して昔話の群に關與せぬ齡になつてからも、默つて傍聽して居て自分の記憶との異同を比較し、もしくは初年の說話を珍重する。老いて精確なる傳承者と評せられるやうな人は、多くは斯ういふ氣質の者の中に在つた。同じく昔話の上手といふ老人でも、孫に責められて漸う昔を想ひ出し、多少の誤謬は承知の上で話すやうな者と、若い忙しい頃から昔話となると氣がはづんで、時には進んでも誰かにして聽かせたいやうな、活き〳〵とした記憶を貯へて居る者とがあり、後者にも聽手の悅ぶといふ點に興味をもつて、能ふ限り面白く又は爲になる樣に話さうとする人と、聽いて置いたゞけを是非聽かせて置かう。斯うして昔から傳はつて來たのだからと、忠實に古傳を守らうとする人とがあつて、女性には後の方の型が多いかと思はれる。近年亡くなられた關君の御母さんも、何かは知らずよほど澤山の昔話を、暗記して居られた樣子である。それを一つ〳〵細かに問ひ尋ねるまで、息子の學問がまだ進んで來ぬうちに、永い別離を見たのは二重の悲しみといふべきである。親は有難いものであつたといふことを、孤兒になつてから私なども

しみ〳〵と感じてゐる。

關君の母御は、果して何れの型に屬する說話保管者であつたらうか。それが先づ考へて見たい問題である。此集に出て居る姪の話といふのは、何れも其おばあ樣から聽いたものばかりだと云ふが、之を讀みかへすと何箇所とも無く、ずつと以前に母からか誰からか、聽いて覺えて居るのと違つた點があると、關君は謂ふのである。それはこの愛慕すべき老婦人が、同じ昔話の色々の話し方を知つて居て、一つを男の子に、他の一つを幼ない孫娘に、分配して與へられたものか、但しは又時や氣分や相手の兒の年頃などに應じて、少しづゝ作爲加減して話すだけの技能をもつて居られたのであらうか。其不審を散ずべき機會はもう來ないであらうが、大體に女性は物語を職業とする者までが、古傳の改訂には謹愼であるのを例とす

る。肥前の島原ばかりにそんな大膽な氣風が、あつたと想像するのは無理だらうと思ふ。たゞもし人が昔話を好み、聽けば片端から記憶の引出しに、仕分けて藏つて置くだけの熱心さへ持つて居たならば、此地方はちやうど其望みのまゝに、一つの說話のさま〴〵の小變化を幾つと無く拾つて竝べてみることの出來る時代に、入つて居たのかも知れぬといふ事は言ひ得る。我々の採集事業は、いつもこの時期といふものゝ牽制を受けて、必ずしも骨を折る程度と比例して、よい成績が擧がるとはきまつて居ない。殊に民譚に在つては其條件が力强くて、折角の優れた傳承者の値打を、時期の不利が割引することさへ有るといふことを、關君も私も此實例に依つて、經驗しようとして居るのではあるまいか。

田中長三老の場合は、我々に適切なる着眼點を供與する。此老は淋しい人生の旅人であつた。あらゆる土地と境涯の耳學問と共に、生れながらの話ずきの素質を抱きかゝへて、ぽつねんとして聽いてくれる人を待つて居た獨り者である。老翁の話には似合はず、彼のもたらすものには新鮮味があつた。話題は在來の範圍を出ないで、往々に粗野に過ぎたる一部の改造がある。海から運ばれて來た民譚の常として、久しく成長した男子のみの間に、是が取囃されて居た痕跡は顯著であつた。童話が單純無難の筋を悅んだのとは反對に、是には聽衆の興を高める爲に、聊か事を好んだやうな話しかへが幾つかある。此老が世に媚びてそれを敢てしたとも斷定しかねるが、少なくとも斯ういふ形を面白しとして、故鄕の湊にまで持つて還つたことゝ、土地にも之を毛嫌ひして棄てさせようとするだけの、律義さはもう無かつたといふことだけは推測し得る。岩倉市郎君の喜界島昔話、豐岐の山口君の未刊の說話集などと比べ考へると、此狀態は必ずしも外部の感化だけで無い。話をいつでも滑稽の方へ、又出來るだけ奇拔な展開に、導かうとする趣味は流行である。濱から荷揚せられる成人用とも名づくべき昔話が、いくら新しい色彩を帶びて來ようとも、陸上の老若男女の「昔」に對する考へ方が、古風であつたならば融合する氣づかひは無い。江戸であれほど盛んだつた落語が、種は往々にして同じでありながら。まだ家々の童話を變形し得なかつたやうに、二者は兩樣の待遇を受けて併存するか、もしくは異端として一方は片蔭に潛んだことであらう。グリムを譯して見せれば、忽ちにしてグリムの空想に、かぶれるといふ近代の說話界の如く、一種の文藝自由が既に此土地にも進出して居なかつたら、斯んな新しい話し方の移植は出來なか

つたことゝ私は思つて居る。勿論その變遷にも原因はあり、交通は又一つの別の力であつたかも知らぬが、それは徐々たる影響で、二三の旅人は言はゞ機運に乘じた迄である。即ち社會がその内部に於て昔話の改造を念ずるやうになつて居たといふことが、この著しい地方的變化を招いたのであつて、所謂民間説話は結局は滅びるもの、急いで僅かに殘つたものを掬き集める必要があるといふ、悲しい推論も是から出て來るのである。優れた傳承者の資格を具へた者が優にまだ有つても、斯うなつてしまへば白象に瓦礫を負はしめるやうなものである。忠實なる保管をする者には選擇までは出來ない。つまらぬはやり唄や出たらめの故事來歴を、いとも大切に覺えて居る人たちに出逢つて、惜しい力だと思ふことは何度かある。それから見ると昔話などは、破片になつてもまだ研究に役立つが、同じことならばやゝ完き形の傳はつて居るうちに、此等の小さい稗田阿礼の、天分は發揮せしめたかつた。

玆に於てか傳承者の型の相異、もしくはその本意の純不純以外に、個々の地方の保存狀態が、如何なる段階に臨んで居るかを、先づ考察する必要は生ずるのである。説話の變轉期は國又は民族毎にほゞ一つの歩調が有り、たとへば獨逸はどこの隅を捜しても、もはや百年以前にグリムが拾つた樣な話は落ちて居ないが、普通教育の僅か遲れた其東隣の國に入れば、今でも口傳への民譚がまだ古風に行はれて居るといふ風な、概觀を下すことも可能であるが、我々は國内に在つて見るせいか、日本だけはさう大づかみな事は言へないやうな氣がする。現に近頃までの二十種あまりの採集を比較して見ても、町と僻地とでは可なり著しい外貌の差異が認められる。大體に敍述が短くなり、話題の數が減じて行くことは、一般の傾向と言つてよいが、是にも地方によつて大いなる程度の高下があるらしいのである。その中に就て、笑ひ話の流行といふことは確かに一つの新らしい現象であつた。私は是を第四期と呼ばうとして居るが、都會で無くとも信州などは、既にさういふ土地が多い。昔話といへば何度聴いてもおろか聖、又は「ちやうづをまはせ」といふ類の、おろか村の話しかしてくれぬといふ老人がもう幾らも居るのである。今までは格別誰も氣づかなかつたが、斯んなたわいもない話ばかりに、却つて驚く程の全國的一致があるのは、恐らくは當初是には別途の管理者があつた證據だらうと思ふ。女や子供だけの力では、是は到底出來さうも無い運搬であつた。人は好んで童話の名を使ひたがるが、話のたちから見ても亦分布の狀態から言つても、

此種の民間説話には成人の關與した痕跡が歴然として居る。即ち山小屋の焚火の傍、或は浦の風待ちの船の中などに於て、屈强な男ばかりが此文藝を愛玩した時代の、影響は可なり大きかつたのであつて、後次第に是が在來のものを壓倒して、をかしく且つ手短かでなければ昔話で無いかの如く、思つてしまつた地方さへ出來たのかと考へる。

此推測の大よそ當つて居るらしい證據は、是に先行する第三期と名づくべき狀態が、今尙到る處の田舍に見られることである。そこでは話の種類がさう少なくはなつて居らぬが、目立つて話し方は簡略になり、且つ知見の狹い婦女兒童の空想には、浮びさうにも無い新意匠が挿入せられ、殊に結末が多く取替へられて、必ず若干の可笑味が附加せられて居る。强ひて凡上の論を闘はさうとする者にも、此方が原の形だと言ひ切ることの出來ぬ理由は、改作の部分が各地區々であつて、海外は固より、國内も遠い處との共通が無い。土地でも其改作に一致したのでは無く、たゞ偶然の選擇が殘つただけである。人が段々に説話の原型を守らうとする念を失ひ、新らしい巧智に耳を借す傾きが生じて、幾つかの話し方が競ひ進んで居た時代を私は想像する。職業的の語り部が旅の世代を重ねて、愈々其藝術を零落せしめたのも此際であつたかと思ふ。今日の宣誓文學の歴史を尋ねて行くならば、こゝまでは遡られる。さうして現在も尙此狀態に留まつて居る地域は廣いのである。斯ういふ地域は我々の採集地としては、刈入れ時は既に過ぎて居るので、全然收穫が不能といふわけでも無いが、是には特別の勞があり、又若干の用意を以てかゝらねばならぬ。少なくとも機械的なる比較法によつて、外國との交渉を推論するなどゝいふことは、もう許されない狀態になつて居るのである。ところが我邦の學者の中には、あぶない人が大分に居る、彼等には特にこの採集期の問題を、明かにしてさし上げる必要が多いやうに思ふ。

説話の頽廢は、素朴敬虔なる傳承者には氣がつかない。誰が其間に入つて混亂を敢てしたかを突留め得ぬ限りは、やはり外形の側から察知するより他の手段は無いのだが、幸ひなことには標準尺度となるべきものが有る。私は曾て昔話の樣式を説いて、その最後の文句は如是我聞、即ち省略も無く又誇張も無く、昔のまゝだといふ誓文の如きものであつたことを述べた。ところが其詞が繰返しによつて古臭くなり、後少しづゝそれをもぢつて新しい言ひ方を試み、終には話者自身も何のためにそれを附け添へるかを、知らずに唱へて居る場合が多

くなつて來たのである。この結末の文句の變化と、話の內容に關する古い約束、卽ち要點は後々の趣向によつて改めてはいけないといふ法則の違背とは、ちやうど相伴うて居るかと思ふ。だから我々はこの外部形式の崩壞を見て、先づ警戒してかゝれば誤りを少なくすることが出來る。自由な近世人の技巧を加味することが、公許せられて居た時代の說話に據つて、直ちに固有の神話形態を類推せんとする樣な無茶者は、如何に百千人の世の中でももう存在することが出來まい。さうなれば研究は義理にも些しばかり前へ進むのである。關氏一門の協力に成る所の說話集は、偶然ながらもこの說話變遷の堺目を、可なり明瞭に心づかせて居る點に於て、ともかくも若干の功績を擧げて居る。無用の勞苦であつたとは何人にも言へない。此上はたゞ我々の利用如何に待つのみであるが、それこそは御手のもので、編者自らが遠からず其例を示して、後世をして感謝せしめるであらうことを、私は期し且つ信じて居る。

但しその利用は出來る限り早いがよい。遲いと間に合はぬかも知れぬ懸念があるからである。我々の所謂第一期、卽ち說話が信仰の支持と拘束の下に、一つの定まつた形を守つて居た時代は、殆と此地球の全面から消え去らうとして居る。たま〳〵僅かばかり殘つた地域があるにしても、それを聽き出しに行く手段は閉されて居る。日本では宮古島の百五十年前の舊史などに、辛うじて曾て存在した痕跡を見出す位なものであるが、奇妙なことにはそれと第二期の說話との間には、大部分の一致があるのである。成人が說話の內容を信じなくなつて後も、努めて原の形を毀すまいとした期間が、久しく續いて居たことを考へずには居られない。獨り尙古家の立場からのみと言はず、昔話の本質を明かにしようといふには、是非ともこの第二期の現象は重視しなければならぬのだが、國を全體としては既に第三期から、四期へ移らうとして居る日本にも、まだ隅々の小區劃だけには、遊藝や旅廻りの者の影響が少なくて、古風の保存せられて居る例が二三で無い。勿論是にも次々の等差があつて、堺目近くに寄ると若干の浸潤は免れぬやうだが、大體に於ては一方ではよほど優秀なる傳承者を見つけても、最早變らない昔話を採ることが難いに反して、この方は通り一遍の話好きからでも、うぶな記憶を喚起し得るといふちがひは認められる。採集家の勞苦を償ふべき收穫の多寡、殊に其中から入用なものを抽出して、之を整頓して行く手數に至つては、兩者は殆と競

べものにもならぬのである。だから奥州の邊土や南海の離れ島などに、まだ少しでもこの變化以前の型が遺つて居るうちに、急いで比較の考察を進めるの要があるので、もしも此等の地域までが全國一樣に、三期四期の狀態に入つてしまつたならば、末には何の爲に昔話を集めるのかを、答へることの出來ない採集家ばかりが、鉢合せするやうな社會にならぬとも言へない。私の判定にして誤らずんば、肥前の島原半島ももう第三期に入つて居る。此集の過半には新たなる作爲の痕が見え、又故意の省略さへ認められる。それを誠實に拾錄するといふことは、無駄では決してないが損な仕事、甚だ張合ひの無い骨折とは言へるであらう。併しさうかと言つて自分の土地をさし置いて、遠い他國の沃土を耕して見ようといふ氣に、なり得ないのは當り前のことであり、又さうした方が利益とも思はれない。殊に關君の場合に於ては、その家鄕に對する深い愛情と、該博なる豫備知識と熱烈なる研究心とが、優に一方の弱味を補塡することを信じ得るのである。なまじひに資料の豐富なる地方の、いゝ頃加減な蒐集家よりも、遙かに立優つた收獲のもたらされることを、自分は少しでも疑つて居らぬのである。

（此書序文、昭和十年四月）

「二戸の昔話」を讀む

二戸郡の昔話は今まで殆と世に知られなかつたが、隣接の各郡ではもう可なり採集が進んで居る。たとへば昨年の九戸郡誌には數十話、下閉伊のは量はやゝ少ないが、岩泉附近のものが古く雜誌「民俗學」等に出て居る。鹿角では內田武志君が叔母さんから聽いた話といふのが、大分多く「昔話研究」にも報告せられて居る。三戸郡のは最近に私の整理した奥南新報同人の八戸地方昔話の他に、能田君夫婦の集めたものが、稿本ながら優に一卷をなすだけの數がある。岩手郡には雫石の田中喜多美君が纏めた「ねむた島」といふ昔話集がある。其中の五分の一ほどが發表せられたゞけで、殘りはまだ本になつて出ては居ない。

「二戸の昔話」を是等の諸集と比較して見るのに、どく僅かの笑ひ話の、やゝ遠方にしか見

つかつて居ないものを除けば、他は何れも皆二つ三つの類型あるものばかりで、それもコヽウ次郎の蟹の話といふやうな、東北特有と思はれるものでは無く、弘く全國的一致の相應に濃厚なものが多い。昔話の精細なる研究に興味をもつ人か、さうで無ければ一郡内の事實だけを珍重して全く他處を顧みない人だけが、此本の將來の愛讀者であらうと思ふ。勿論それは必ずしも失望すべきことでは無く、今まで昔話を個々の家庭の小兒と老女との處理に委ねて、どうなつてもかまはぬと考へて居た鄕土人に、是ほど共通なしかも傳來の古いものを、互ひに氣づかずに抱へ込んで居たことを、發見せしめることも亦一事業である。我々の仲間でも、始めから愛にさう〳〵新らしいものが、隣れて居ようとは豫期しては居なかつた。郡を隣して同じやうな生活を續けて居た人々の間にも、なほ小さいながらも數多い變化が見られるといふことは、言はゞ昔話のよく變化するものであることの、何よりも明かな證據である。それが大體如何なる徑路を取つて變るかは、實はもと〳〵豐富なる採集、時としては一見徒勞にも近い筆錄を、繰返して行かなければならぬので、今日は或はまださういふ人が少ないかも知らぬが、此點に十分な意義を認めた者で無いと、到底道樂から學問を分離せしめることは出來ぬのである。さうして『二戸の昔話』は、ちやうどこの二つの方角の、岐れ路に立つて居るやうに我々には見える。

乃ち一つの書物の讀み方、或一人の篤志者の勞苦を、如何にすれば最も適切に利用し得るかを、考へて見るべき機會が作られたのである。自分の心づいた二三の點を擧げるならば、瓜子姫子の話は東北では一般に、今では皆姫が殺されてしまふことになつて居る。其慘虐はかちかち山の狸汁に近く、さうして又結末の明るさが無い。然るに此郡で採集せられた一例のみは、關西各地や信州など〻同じに、木の梢につり上げられて縛られて居たのを、後に爺婆に助けおろされたことになつて居る。此方が恐らく一つ前の形であつたらうことは、別に栗を拾ひに栗を採りにといふ挿話が、この附近にあるのを見てもわかる。卽ち前には姫が危難を脫したといふ形で入つて來たものと、後にどういふわけがあつてか、殺して皮を剝ぐなど〻いふ、怖ろしい改造を加へたものとがあつたのである。仙北地方に曾てあつたといふ錦長者の話など〻の元の繫がりは、もう少しこの中間の型を調べて見なければ尋ねられぬわけである。

それから有名なる糠子米子の話は、西日本では既に痕跡となり、奥羽にばかり比較的完全に近いものが行はれて居る。二戸にあつたものは省略があるが、それでも繼子が後から神樂見に出かけて、妹の席へ粗敉を投げつけた條が殘つて居る。是はシンドレラ說話の最も世界的な一挿話で、南歐羅巴ではオレンジの皮を投げたことになり、奥州でも或は飴の皮、饅頭の袋などになつてゐるが、それを此地方でヲコシ又は菓子とかへて、なほ同じ順序を追うて居るのは面白いと思ふ。斯ういふ食物が新たに流行するやうになると、話者は次々に小兒の好奇心に投じて、其物品の名だけを取替へながらも、なほこの箇條を入れることを忘れなかつたのである。「天道樣金の綱」といふ名で通つて居る、三人の子供の鬼婆に喰はれようとする話なども、通例は鬼婆が墜死し小兒は助かつたといふだけで終るものが日本には多く、其まゝ天に昇つて星になつてしまふといふ形は、九州に二三と、朝鮮の類話にあるだけだと思つて居ると、二戸で語られる話は明かに星になつたといひ、しかも彼方には無い蕎麥の莖はなぜ赤いといふ條を保存して居る。三人兄弟の話には色々の變化があるが、魚の命を助けた御禮に、生針死針といふ寶物を貰つて來て、それを利用して長者になるといふ一例は、東北の方では聽くこと稀で、遙か離れた喜界島などでは、却つて打出小槌や延命小袋以上に、この生針死針の寶物が多く說かれて居る。是なども多分はやゝ古い頃からの流行が保存せられて居るものであらう。

是とは反對に新たに變化して元の姿を留めないものでも、その變り方が少しでも他とちがつて居れば、之に由つて亦成立の經路を尋ねることが出來る。たとへば今日普通の「笠地藏」は、寒い歲の暮に町へ笠を賣りに行くとか、もしくは麻の布を賣りに出て、賣れなくて笠と交易して還つて來るとか、智慧の足りない老翁の所行に、先づ聽く人の笑ひを引いて居るのだが、二戸の一話では是を笠賣長者と呼んで居るのを見ると、本來は主人公が笠を賣つて生計を立てゝ居たところが要件であつた。即ち至つて貧しい、山野の植物に加工して、僅かに露命をつなぐ程の者が、なほ心やさしく信心深くして、惜しげも無く其笠を地藏樣に着せ申したといふ點が中心だつたかと思はれる。從つてかの尾州笠寺觀音の緣起のやうに、必ずしも暮の雪降りの日とは限らず、單に野中の俄雨に沾れてござるのを見てと語つても同じ話だつたのである。文福茶釜といふ話は、上州館林の茂林寺が有る限り、東京の子供にもなほ永

くもてはやされるであらうが、考へて見ると實はあまりに突兀たる趣向で、通例の動物報恩譚とは發端が丸でちがつて居る。爺が折角丹精して作つた豆を、狐が食ひ荒したので怒つて捕へたところ、狐が罪を謝して其代りに茶釜となり、寺に賣られて金儲けさせてくれるといふ話は、津輕口碑集の中にも一つ見えで居るが、それだけでは實はまだ合點が行かなかつた。二戸郡の類話が現はれた御蔭に始めて氣がついたことは、是は我々のいふ「八石山」の話から分岐した、一つの大話の後に續くべきものであつた。東北では之を總稱して「豆こ話」と呼んで居たらしい。二戸でも其數例が採集せられて居るが、他郡にあるものも文句は殆と同樣で、以前座頭の仲間が之を早物語の一つとして、暗誦して居たことが察せられる。たつた一粒の豆を拾つて、鍋で炒れば鍋一ぱい、臼で搗けば臼一ぱいになる。それを飾ふ爲に鄰家へコオロシを借りに行けと嫁にいふと、表を行けば牛が居てこはい、裏からまはれば犬が居て怖いなどゝいふ問答があり、最後に爺の小袴の端で粉をおろしたといふことに今の話はなつて居て、最後の尾籠な屁の話に歸着して居るが、もとは三河の犬頭鷲の白犬や、打出小槌の話にある稻穗をくわへて飛去つた鳥のやうに、何かもう一段と際どい冒險があつて、それが忽ち轉回して途法も無い幸運になつたと謂つて居たらしいのである。乃ちまだ容易には斷定を下し難いが、或はこの狐が茶釜や太鼓に化けてくれたといふのも、一種有り得べからざる誇張譚の一場面として、最初から聽手の笑ひを目的とした、空想の作であつたかとも思ふ。「八石山」の本話も奥州には可なり弘く分布して居る。此集に出て居る爺の豆植ゑの話の如きも、亦一つの面白い發達のやうに思はれるが、何分話し方が粗相で、肝腎の所が脱落して居てよくわからない。

此以外には、時鳥と郭公の話に、殺されたのが弟でなくて母であつたり、猿と蛙の餅爭ひに、臼を山から轉がさずに阪の下から押し擧げたり、又は兎と狸の話で、後段では兎の方がやつゝけられて尻尾を失つたり、或は猫檀家の話に狐が參與したり、色々珍らしい變り方が目につき、昔話の歴史は亦それ等からも探り出せさうに思ふが、其爲にはもう一度土地に臨んで、第二の採集を試みなければ、是だけではまだ比較の資料には少し足りない。不思議でたまらないのはこの多くの種類の昔話が、「雲雀の貸金」とか「ほら吹き甚兵衛」とかのほんの二三の例外を除けば、他は殆と一樣に省略せられ、中には端切れ間の拔けたものさへ、幾つ

かあることである。聽手はもとより話者の側から考へても、是でよいと思ひ筋が通つて面白いと感ずる筈は無いわけだが、もう今日ではさまで内容を顧慮せず、單に昔話といふ言葉だけを聽いたゞけで、笑ひをかしがる樣に此地方ではなつて居るのであらうか。是も亦民間傳承の學に携はる者の、精細に留意すべき一現象である。

方言で各土地の昔話を記錄することの適否といふことも、此書を讀むに際して又改めて深く考へられる。鄉土の讀者にとつては、もう是だけの説明でも既に煩はしく、福島縣以南の全國の同志者には、是だけではまだ話の面白みまでを把握することが出來ないからである。其上に是等の資料は、大部分は中間の報告者があつて、そのまゝ文章になつたのでは無いから、筆者の若干の刪定は免れず、寫眞やスケッチとは同一に見ることが出來ない。つまり昔話が弘く世界人類の共有財産であり、合せ比べて見なければ價値が無いことを、認識した人なら採用すべからざる方式であつた。しかし今日の方言研究者にとつては、是は實用を例示した好參考であつて、之を保存して置くことは個々の單語集より遙かに利益が多い。今は先づその副産的の效果を以て、滿足して置くの他はあるまい。

（旅と傳説、昭和十三年一月）

昔話解説

話を好む心

既に二百年も前から、普通の成人の間には「昔話」といふと、何かよく〳〵無用なる暇潰しを意味するやうになつて居た。又おぢい樣が昔話をなさるなど〻いふ時には、蔭でくす〳〵と笑ふ者が必ず二三人はあつた。久しぶりに訪ねてくれた友人を引留める場合に、今夜は一つ昔話でもしてといふことは、別に是といふ目的も無いがといふ心持で、主客顏を見合せて微笑するのが習ひであつた。話好きといふ人は土地に必ず幾人かあるが、彼等に向つて昔話を承りたいといふことは、或はやゝ失體なやうにも取れぬことはなかつた。

それ程にまで有觸れた又古臭いものになり果てた理由は、一つはムカシといふ語の響き、

二つには歴代の長老たちが、聊か此ものを利用し過ぎた反動でもあらうが、更に又昔話自身が消耗磨滅に由つて、年と共にその鋭利な力を失ひつゝあつたからであつた。新たに昔話を補充する苗床が、先づ最初に荒廢に歸したからであつた。名は昔話と稱しても其實常に清新であつたものが、次第々々に源に於て濁り始めたからで、乃ち單なる趣味の變遷のみを以て此零落を說明することは出來ぬのである。

當世の所謂坐談に長じたる人たちが、友の心を引付けようとする用意を見ても、昔話の歴史の一半は窺ひ知られる。彼等の話術にも固より若干の改良はあるが、それは唯古風な落語業などの、世を迫うて人氣におくれまいとする苦心と同じ程度のものである。最も大いなる努力は主として題目の選定に在つて、言はゞ出來る限り昔話と認められる懸念の無いやうな種を、見附けるのに骨折つて居るのであつた。けふも誰それが遣つて來て、色々な世間話をして行つたなどゝいふその世間話、もしくは四方山の話などゝ謂つたものが、いつと無く我我の昔話の領分を侵蝕して居るのである。世の中が多忙になつて、昔話をする餘裕が無くなつたやうにいふのは事實に反する。人は依然として話の爲に費し得る時を持ち、又話によつて休息を價値づけようとする念慮を抱くのみならず、多くの世間話は亦過ぎ去つた出來事であつて、人が昔話の輕蔑せられてもよい理由と認めて居るものを、大抵は具備して居るにも拘らず、是ならば安心していつ迄も長尻をする氣になるといふのは、畢竟するところ昔話の不人望になつた原因が、別に他に存することを意味するものではあるまいか。

セケンといふ名詞を弘く人間社會といふ心持に解することは、さう古くからの風では無かつた。元は說教者などの用語を學んだものと思ふが、多くの田舍では之をたゞ外部といふ意味に使つて居た。世間師は卽ち旅をした人、異鄕の事を知る者のことであつた。それ故に彼等の世間話に耳を傾けようとする動機は、曾て昔話を聽いた時と、大した相違も無かつたのである。昔話も其盛時に於ては、次々に外から供給せられて居た。之を運送した者は世間師の、特に職業的なるものであつた。それが段々に數乏しくなつて、土地に今まであるものを繰返さねばならぬことになると、自然に昔話は古池の水の如く、古び且つ沈滯せざるを得なかつたのである。

或は需要が先づ衰へて、之を持込む者が引合はなくなつたからと、考へて見ることも出來

るやうだが、都市の限られたる高級の生活者以外、多數の國民が話の缺乏に苦しんで居たことは、つい近頃までの現象であつた。讀み物の無差別なる流行は寧ろ其結果である。學校の教育が少しく文字の力を付與するや否や、怖ろしい程の好奇心を以て、何でもかでも書いたものならば聲高く、讀んで見ようとしたのは何故であつたか。新聞や雜誌が僅かな歲月の間に、苦笑すべき日本一流の特色を作つて、講談と挿畫を以て客を引いて居ることを、誰が昔話の相續人で無いと斷言し得るであらうか。此種讀み物の效果は如何にも大きかつた。殊に戰爭といふ大昔以來、人の最も注意する題目が實際化してから後は、村では所謂世間話の中心を、兵士と其親族故舊とに置くことになり、それに變化を加へようとすれば、新らしい話柄を遠來の文書に求めるの他は無かつた。卽ち古くは西洋で十字軍役後の動搖、日本でいふならば江戸時代初頭の、武邊咄から太平記評判までの推移と、ほゞ性質を一にする流行の型であつて、學問意識の是ほどに進んだ世の中でさへ、なほ通常人の態度には根本的の變更は無かつたのである。古くなり又廢れたのは「昔話」といふ名前であり、もしくは此名の起原を爲した顯著なる外形のみであつた。さうして其二つの者は前代に於ても、やはり時と共に改まつて居たのである。

話と形式

そこで問題はどうすれば「昔話」の範圍を、今少しく熟視に適するやうに、具體的に區劃することが出來るかといふ點に移つて行くが、大勢から言ふと話も亦他の技藝と同じく、追々に樣式の拘束から自由にならうとする傾きは確かに見える。從つて之を標準として新舊の差別を立てゝもよいやうではあるが、一方には現今の世の中にも、所謂相も變りませぬ前置きを以て、御機嫌を伺はうとする話し家があると共に、以前も少しづゝは新味を求める爲に、永く一つの形に停滯することはしなかつたのである。例へば昔話といふ名の起りと目すべき最初の一句の如きも、伊勢物語は必ず「昔男」を以て一貫し、今昔物語も亦「今は昔」で終始して居るのに、宇治拾遺に至つては既に處々「これも今は昔」と、稍其單調を破らうとする試みが見える。文書に固定した話にすら、少しづゝの時代變化が認められる。況んや口を傳ひ耳

を借りて必ず傳へようとした場合、屢〻定形に背いて自他の倦怠を避け注意を新たにし、乃至は作爲を以て是は平凡の昔話で無いことを、感ぜしめんとしたことは當然である。或は上古に於ては必ず守るべき法則があつたかも知れぬが、少なくともそれを自由にしたのは決して新時代の事業では無い。

小兒は獨り此間に在つて、いつ迄も在來の樣式の興味に心醉したといふことは言へる。現に巖谷小波氏等の新作に成るものでも、きまつて昔々或處にもしくは先づ或處に、王樣や魔法使ひが現はれて來るのである。ところが永い年月のうちには、此方面にさへも色々の破壞が行はれた。多分は親々兄姉などからの、間接の感化であつたらう。彼等の昔話さへも外形に由つて、分堺を立てることが幾分か困難になつた。土地なり時代なりに相應して、一つの公認せられた話し方があつたとは言ひ得るが、それが互に似て居なかつたことは、尙且つ今日と以前との差も同じであつた。東國から奥羽にかけての近世の型は、寧ろ故意に重苦しく念入りにするのが流行であつたらしい。

むかし〳〵其昔、ずつと昔の大むかし

など〻謂つて、幾分か中味を待遠に思はせたのも新技術であつた。必ずしも今日の實際では無いぞと、豫訓するだけの趣意では無かつたこと〻思ふ。しかし全體を遊戯化しようとした時代の文化は察知することが出來る。出雲國などの今日の御伽噺は、方言でトントンカチと大人も謂つて居る。言ふ迄も無く「とんと昔」であつて、それが御話の初の一句に基づいたものなることは明かである。恐らくは小兒が唯一の聽衆となつて後に、設けられたる方式だらうと思ふが、江戸にも此形は曾てあつたと見えて、近代の落語の中に其痕跡がある。たしか化物どもが寄合つて芝居をしたといふ落語で、三つ目入道が何かゞ下座の木の頭に乘つて、トントンカカカと謂つたといふのが下げになつて居る。今の人にはもう可笑しくも何ともないが、つまりは子供の昔話の中から、拔け出して來たものだつたといふ暗示に、意外の興を催したもので、卽ち斯ういふ落語を賞翫した成人が、まだ自分の幼い頃の昔話の、一つの形式を記憶して居たのである。筆者等の聯想は、トントンカカカは祭の日の太鼓の音である。仙臺などの童言葉にも、御祭又は御神樂のことを、今でもドンドンカ〻カと謂つて居るさうだが、それも亦右にいふ「とんと昔」と語音が近い爲に、殊に勝れたる面白味があつたのかも

知れぬ。筑後の三潴郡などでは堇の花のことを、子供たちはドドウマカチカチと呼んで居る。此花の形が少しく馬の頭と似て居るところから、他の地方で角力取花など〳〵いふ代りに、之を馬競べと謂つて遊んだものらしいが、それにも昔話の最初の一句の、口拍子は移つて居るやうに思はれる。即ち普通の話好きは一樣に、型にはまつた話し方を排斥するやうになつてからも、小兒ばかりは次から次へと流行を追うて、何か餘裕のある耳に快い語音を以て、先づ其好奇心を整理せられんことを要求して居た證據である。

子供らしさ

それが童話と名づけられるもの〳〵範圍の、つい近頃まではつきりとしなかつた理由であらう。現代の人は勝手に漢語の名稱を付與して置きながら、少したつともう忘れてしまつて、其文字から定義を推論しようとする癖があるけれども、元々何人の約束でも無いのだから、それが實際と合致する筈は無い。始めから子供だけにして聽かすといふ童話がもし有つたら、今少し際立つた發達をして居たらうが、グリムにしてもアラビヤ夜話にしても、乃至は二百年來の猿蟹・桃太郎の類にしても、それが小さい者に向くといふ部分は、强ひてあどけなく語らうとする外形ばかりで、其内容に至つてはどれも是も、一度は霜降る夜の篝火の影に照らされ、もしくは髯白き聖者のしはぶきの間から、貴き教訓の珠玉として拾ひ上げられた名殘を、留めて居らぬものは無いのである。それが年久しうして次第に新しい物の下積みとなり、たま〳〵初めて世に生れた者の手に取上げられるといふことは、可なり開けた社會だけの、限られたる現象に過ぎなかつた。童話は即ち或民族の口承文藝の、ほゞ終に近い一つの時期、もしくは次の文化に移らうとする階段の如きもの〳〵、名稱と謂つてよかつたのである。

書物の學問に累はされなかつたならば、此變遷の經路を見知ることも、日本に於てはさまで困難で無い。昔話と童話との關係は、同時に亦儀式と遊技、道具と玩具との關係である。村に住む人には今ならばまだ記憶する者もあらうが、以前は特に小兒の爲に製して賣出すやうな玩具は無かつた。おもちやは即ちモテアソビで、物差火吹竹踏臺の類、何でもかでも持出

して遊んだのは、ちやうど昔話が彼等に向つて話されたと同じであつた。土地によつてワルサモノとも名づけて、別に木ぼこや紅木綿の猿などを作つて預けて居たが、それ等も皆家々の手製であつた。宮の祭とか寺々の緣日とかに、馬だ弓矢だ笛だ狐の面だといふ類の賣り物も、もとは家の爲に大人が買つて還ること、鷲神社の熊手など〻同じであつたものが、後には子供にせがまれて何と無く求めるやうになつた。斯くして導かれた今日のセルロイド流行は、つまりは太小の文學者たちの、所謂童話集に該當するものである。

同じ比較は亦遊戯方法の變化に就いても繰返すことが出來る。例へばま〻事や姉樣事は何人が考案して、特に彼等に敎へたものでも無いが、兒童は時を構はずに幾度でも同じ模倣を重ね、小さい妹たちの之を見習ふ者が多い爲に、今では著しく現實の社交慣例とは違つて來たといふのみで、それが或時代の作法を眞似たものといふことは誰でも之を認める。しかもさかしい兒ならば少しづ〻は自分の觀察に由つて、しぐさを改良して出來るだけ實際に近づけようとして居る。選擧が始まれば選擧ごつこ、戰爭中には兵隊ごつこなど〻、自然に任せて置けば大抵は成人の所業の中の、一番珍らしく感動の多いものを模倣するが、子供は一般にや〻保守的で、面白いものならば當分はなほ續けて行き、其中には型が出來て手本とは關係無しに、久しく保存せられるものもあるのである。所謂童話の兒童用の如くになつて傳はつて居るものも、多分は亦この面白い型の爲に久しく保存され得たといふのみで、假に其內容が今日の目には子供らしく見えても、之を以て最初から彼等のために作られた證據とするわけには行かぬ。といふよりも反對の證據が、却つて幾らでも擧げ得られるのである。

是が我々の幼稚園の先生たちと獨立して、別に子供の國から彼等の持つ昔話を、拾ひ集め且つ眺めて見ようとする理由である。三つの重要なる事實を親たちはもう忘れようとして居る。其一つは親が小さい者の爲に說かうとする動機が、昔は丸々今と異なつて居たといふことである。鳥や獸の敎育方法を觀察して居てもわかる如く、是だけは是非とも大きくなる迄の間に、覺え込ませて置かねばならぬといふことが、昔の社會には中々多かつたのである。單なる娛樂や笑ひの爲に、彼等の相手をして居ればよいといふ心持で、人が童話を語るやうになつたのは、ほんの近頃の變化であつた。第二には小兒が成人の事業に加入しようとする要求が、現在の集合敎育の始まる以前は、遙かに今よりも强烈に且つ早期であつたこと、是

は決して模倣の一面に止らず、又色々の生活方法の選擇の上にも現はれて居る。殊に多くの夜話の席などでは、獨り彼等が聽衆たることを許したのみならず、兼て最も細心なる觀察者であり、又記錄者なることをも認めて居た。即ち別種の昔話の、特に子供から子供へ傳はつて行くものを、想像し難い理由である。第三には前代の共同團體に於て、兒童に課せられたる分擔事務の可なり重要なものであつたこと、是も今日は計算に入れぬ人が多いが、祭や物忌や家々の儀式などに、彼等をして舞ひ又は語らしめたことは、決して彼等でも間に合ふからといふだけの、簡單なる便宜主義からではなかつた。特に稗い者の聲を借り擧動を透して見なければ、有難い又はめでたい大昔以來の民族的情感を、蘇らせることの出來ぬ場合が多かつたからである。さうして昔話は、假令久しい間もう中心からはづれて居たにしても、少なくとも其慣習の周りに於て成長したのである。即ち親たちが次々に他の問題を考へて行くべき世の中になると、却つて子供に賴んで古い話を傳承してもらふ必要が多くなり、從つて管理者の趣味が少しづゝ外形の上に加はつて、末には現在とは緣の遠い御伽の世界といふやうなものを、作り出すことになつたのである。

童話と昔話

童話と呼ばるゝもの〻學問上の價値は、此沿革をよく會得した上で無いと、本當に之を計量することが出來ない。昔々ある處にといふきまり切つた一つの形式は、成程大切な多くの物語を、子供らしいものに零落させてしまつたが、同時に又是が無かつたら斯んなに久しく、我々の祖先の觀照と興味とを、貯藏することは出來なかつたらう。歷史は時代々々の政治の都合によつて、わざとでも解釋を改めて行かうとする。さうで無くとも今日の價値批判から、眼を遮ぎる高い垣根の向うに在るものを重んじないのは致し方が無い。ところが昔話は、曾て之を信じようとした時代ですらも、尙それが昔々の大昔であることを要件とせねばならぬ程、空漠たる物語であつた。もし童兒が其傳承に參與しなかつたならば、必ず次の新しいものと取換へられて、夙に雲煙の眼を過ぐる如く、消えてしまつて居たに相違ないのである。

但し童話も亦久しからずして、遊戯や玩具と同じく新しいものを待つ時代が來ることゝ思

ふ。十年餘り以前、南海の或田舍で、現に小學生の持つて居る話の種類を集めて見たことがあつた。私の喫驚したのは土地の口碑の少しづゝ壞れたものゝ間にまじつて、二宮・塙といふ類の偉人の傳記、それから巖谷小波著「博文館の西洋御伽噺などが、幾つと無く記憶せられて居たことである。考へて見れば其子供の母や叔母が、ちやうど拾ひ讀みをする頃に此本はもてはやされた。話をせがまれる大人たちが先づ思ひ出すのは、やはり自分等の小學校時代に、最も深い印象を受けたものであつて、それが再び顏を出すのは、實は意外でも何でも無い。話は結局二代を經れば、消えも改まりもするものであつて、それが殘つて居たのは世の中が今で無かつた御蔭と言つてもよかつたのである。

昔話と童話との差別に就いては、學者の色々な尤もらしい說もあらうが、自分だけは寧ろ子供の一樣に抱て居る概念に從ひたいと思ふ。是も玩具の譬へを持つて來ると說明が樂であるが、大人はよく「物差をオモチヤにするな」など、いふが、子供は決してそんな物をオモチヤとは思つて居ない。それと同じやうに買つて貰ふか作つてもらふか、兎に角に新たにあてがはれたものが童話であつて、前からあつたのを家なり村なりでして聽かされる場合だけ、之をオハナシ又は昔話と謂ふのである。二者に對する彼等の態度は、存外はつきりとして居る。作り話もしくは津輕でいふウソムカシの類には、一種の反感をさへ抱いて居る。即ち所謂爺婆の昔話のみは、ほゞ以前の世の成人と同じやうな心持を以て、之を覺えようとする風が見える。どうしてさうあるかは私にはまだ說明し得ぬが、多分人類の本性に具はつた歷史慾とも名づくべきものの作用であらう。固より年齡や氣質にもよるが、あの話を今一度してくれなど、、知つて居ながら又聽かうとするやうな念慮は、如何に面白くとも今風の童話の方では滅多に起らないやうであるに反して、昔話といへば殆と何遍でもせがんで聽くものにきまつて居る。

だからこの二種類を童話の名に總括して、之を他の昔話と對立せしめることは、自分等には出來ないのである。或は童話を製作童話と傳承童話とに、分別すればよいといふ人があらうが、その傳承童話は正しく子供を仲次とする昔話で、今日はもう其以外には、取立てゝ昔話といふべきものは幾らも無いのである。殊に小兒の側では昔話は是しか無いと思つて居り、別に彼等を除け者にした秘密の昔話があらうとは信じない(實は少々あるのだが)。それ

が本來決して彼等の爲に出來たもので無く、從つて爲に良く無いと判定せられるものもあるか知らぬが、今頃其間に堺線を劃することは、出來もせず又恐らくは不必要である。さうして一方を保存する迄も無く、現實は良いものも悪いものも、共に〳〵消えて行く途に在るので、單に教育方法の立場からならば、最早急いで採錄して見たところが、それをどうしようも無いのである。過去數千年の民族の歴史を通じて、曾ては藝術を統一し思想を誘導した大いなる力の一つが、今や僅かに機嫌買ひの、寢つきの悪い子等の空想の中に、最後の殘壘を保つて居ることを知つた者は、假に現世の生活とは直接の交渉が無いまでも、何とぞしてせめて此方面から、所謂砂の上の足跡を幽かな前代に辿つて見ようとする故に、いゝ加減な今日の分類に任せては置かれぬのである。

記錄性と現實味

或はまだ心つかぬ人も多いか知らぬが、昔話の昔を保存する力、六つかしい語で記錄性とも名づくべきものは、必ずしも評判の如くあやふやでは無い。其證據として殊に顯著なのは、同じ物語の色々の階段が、入交つて諸國に分布して居ることで、それが假に一種の運搬者の所業としても、土地で受入れて守護して居た期間も亦、それ〳〵相應に永いことであつた。小兒ばかりの手で之を預つて居たものなら、もつと早く汚すなり壞すなりしたであらうが、實際は多くの場合に、用心深い後見人が附いて居た。自分々々の幼い時を回顧して見てもよくわかるが、我々は決して遊び仲間の誰彼から、面白い昔話を得ようとは豫期しなかつた。村の内でもあの人といはれるのは、大抵は昔と聯想し得るやうな老いたる物知りであつた。家庭にさういふ年寄りのある家の子供が、自身も亦いつと無く未來の話ずきになるのは、必ずしも遺傳の氣質ばかりで無い。閑暇と愛情とを綯ひまぜた親切が、最も有效に深い感化を與へて置くからで、偶然とも見られない事實は、其印象が常に人生の半分、働き盛りの約三十年ほど潜んで居て、孫たちの顏を見る頃になつて、油然として再び目さめるのである。別の言葉でいふと、昔話の寺社緣起など〳〵異なる點は、これを話し手の趣味智能に由つて、改訂して置く機會の甚だ尠なかつたことである。

傳承を一筋の鏈であるとすれば、昔話に於てはその個々の鐵の環が、大きくて又丈夫であつた。同じ五百年の世代を繋ぐものとしても、謎や諺や仕事唄と比べると、授受の度數が遙かに少なかつた上に、村毎に家庭毎に結び目がくひちがつて居る。昭和のお婆樣は明治の初年に聽いて置いた話をする。大正の少年は江戸期終りの頃の口碑を聽いて、それを更に未來の孫に引繼がうとするのであらう。其上に谷により濱によつて、早くからの組織の異同もあつた。詳しく聽きもせずに大抵はその話なら知つて居るといふが、實は比較に由つてまだ〳〵發明し得る部分が多いのである。

次には是も奇矯の言の如く聞えるけれども、自分などは小兒の昔話の中から、まだ澤山の現實味を認めて居る。英國の所謂フェアリィテェルズは、隨分讀んで居る人が日本には多いやうだが、あれに出て來る色々の小さい異人が、獨り教育ある都市の兒童に、微笑と夢の種とを供給するに止らず、今なほ淋しい草原の端、又は古塚の木立の蔭などに住んで、稀々には農夫や馬車曳きの徒を驚かし、少なくとも瞬間の後姿、幽かなる月下の物の音などに由つて、まだ居るといふ感じを片田舎の住民に與へて居ることは知るまい。我々には又耳馴れた蛇や猫が仇を復ず話、河童芝天天狗山男の類が、人に近づいて無闇　相撲を挑み、もしくは智慧競べをしようとする話なども、そんな事があるものかと心から嘲る者には、實は大して面白くは無いのであつた。其時は高笑ひをしたり戯れたりして居ても、知らず識らず最も引附けられて居るのは、所謂半信半疑の不思議であつて、暗い晩一人還るときなどは、幻しを作るまでに其印象が再現し、さうで無くともうつ〳〵と夢の境には、何度となく其記憶が蘇つて居る。それが全然無いやうな境遇になれば、もはや昔話とは緣は切れてしまふ。語り手の方でもよく其實情を知つて、努めて效果のありさうな方面を求めて、その口碑を保留せしめんとしたのであつた。

實生活の需要

狐や狸の化けた騙したといふ話の如きは、如何に無頓著な昔の親たちでも、之を最初から子供にして聽かせる話として發明して置かう筈が無い。殊に自分等が早くからさう思つて居

たのは、五大昔噺の一つとしては有名なカチカチ山、婆を汁の實にして爺に食はせるだの、流しの下の骨を見ろだのといふが如き話が、小兒の趣味に似つかはしからうなどゝは、誰だつて想像し得ないことである。そんな話が三つ四つの子の添寢の物語に殘つて居るわけは、全くこの小天地以外に、この傳承の生息し得べき一隅が無かつたからで、しかも他の一面には以前必ず此話の下染であつたと思ふ狸憎惡、この無邪氣なる里の獸の、奇異なる習性に對する甚だしき誤解は、今以て實際に引續いて居るのである。古人は如何なる場合にも常に細心なる天然の觀察者であつて、同時に亦不可思議の承認者であつた。鳥獸草木の靈の力を對等視し、曾ては彼等も亦公々然と、物を言つたことがある時代を想像して居た。さうして各人の實驗の徐々たる訂正以外には、別に是といふ反證の手段も持たなかつたのである。故に未知の世界には絶えざる警戒を必要とし、最初は單なる力の鬪爭を以て、次では優越なる者との妥協に由り、もしくは更に公正且つ親切なる第三者の介助を信じて、迫々の環境の威壓から解放せられて來たのである。今日の目から見ればその何れの方法も無益であり、不安その物が無意味なる獨斷であつたかも知れぬが、兎に角にさう思つたことは現實であつた故に、子孫を安泰ならしめんと欲すれば、必ず昔話を記憶させなければならなかつたのである。

だからカチカチ山の話の最も胸を轟かす部分、即ち敵を憎むの術、怨みは必ず報ずべき法理の如きものは、新しい社會倫理を以て正式に否認せられる迄は、生きて展轉してどこかに殘つて居なければならなかつたので、それが眼前の時代思潮と合致せぬといふことは、其外部樣式の子供らしさと共に、單に童話の世界に身を潜めて居た期間が、可なり永かつたといふ推測を導く迄である。歴史を讀んで行くとよく解ることだが、一般人類の屬性の中で、勇氣ほど必須であつてしかも長養し難いものも少なかつた。我々が小さき群を爲せばすぐに優劣の等差が著しく、一人を除いた他の全部は、自然と雌伏讃歎の生涯に入つて各個の行動を不可能にする。殘虐も一種の愉快であつて、或は新人の野心を誘ふに足りたか知らぬが、その惡弊はあまりに共同の生活には痛切であつて、到底その傾向を制限せずには居られぬ。正義と確信とが身の力の用ゐ處を辨別せしめる迄の間、個々の家長をして平和なる猛者たらしめんとする手段には、古人悉く心を惱ました痕跡がある。現に微々たる野獸の脅威に對してすらも、今尙完全に平氣であり得ない人が多く居り、彼等は相集まつて狐狸實は至つて愚で

あること、方法を以てすれば容易に其秘計を破り得ることを報告して、愉快なる經驗を集積し、且つは將來の對策を講じたので、その爲に夜話の會合は、つい最近まで滿座皆耳であり、殊に物知らぬ婦女と童兒とは、眼を丸くし息を詰めて、敬虔に之を傍聽して居たのであつた。

しかし說話が文藝に成長して行く路筋としては、單なる鬪爭の記錄は餘りにも陰慘であつた。新たに供給せられる材料の中には、又實は幾分の悲觀の種さへあつた。（但し敗北者は通例隣り村の者、又は仲間ならば常から輕んぜられる中以下の人物であつたが、聽衆の半分は彼等だけの自信すらも無かつた）。所謂一つ話として永く保存して置かうといふ考への起るものは、今少しく明るい嬉しいものでなくてはならぬ。勝つた悅び敵の亡びて行く面白さといふものは、前後を切り離して額面にして懸けて置いてもよい。獵や戰に主人を送り出す者の心には、我々の想像以上に此繪が一つだけ光り耀いて居た。羅馬の廢墟に凱旋門が立つて居る如く、今の心には是とても淋しさの種ではあるが、それが新たに現はれた世の中に於ては、恐らく一切の聯想を藤に押籠めて、飽かず是ばかりを眺め入るだけの興奮があつた。否寧ろ人間の力に限りあり榮えて後は又衰へることを知れば、却つて若干の空想の花環が、其周りに纏ひ附けられたかも知らぬ。桃太郎に代表せられる寶島の征伐などは、被害者が鬼である爲に今の世にも通用するが、この類の勝利譚は少しづゝ形をかへて、一切のめでたしめでたしに必ず伴うて居たやうである。その中の一番散文的なるものは、金を拾うた夢となつて今の世にも殘つて居る。村の小學校の子供たちが、集まつて話して居る誇張談中には、單なる利欲もしくは幸運の豐富で無く、又相手の敗北といふだけの凱旋記でも無く、必ず今一段と具體的な、色彩好味芳香といふが如き、他人をして快い感覺に同化せしめるものが多かつた。自分の見聞が爰で役に立つなら、今でも心の動くまで鮮明に思ひ出すのは、萱原をあるいて居たら雉の卵が十二あつたとか、谷川の一方の岸が全部蕨で、まだ何人も手をつけて居なかつたとか、鹿が田の溝に入つたのを角を縛つて手捕りにしたといふ類の、珍らしくもまた心地よい事實談で　もし上手に話してくれるなら、ウソでも構はぬと思ふやうな繪樣が多く、しかも何人がいつ何處でといふ點は、とくの昔に忘れてしまつて居る。つまりは昔話の缺乏を、斯ういふもので補はうとして居たのである。

幸運の法則

桃太郎が桃の中から生れたといふ一條は、固より取つて附けた外形の潤色でないに拘らず、あまり奇怪でありあまりにも「童話式」であつた。それ故に高木敏雄氏の如き人まで、平生尊崇せざるマックス・ミュルラァの故智を學んで、字義に基づく説明を試みんとしたのであつた。しかし此話の一つ前の傳へが瓜子姫子、即ち川上から流れて來た見事な瓜の中に、入つて居た小さき神童であつたことが解つて、後には其誤りを悟つて居たやうである。形は人間でも力は神であつた人を理解する爲には、殆と必然的にその異常生誕と突如たる成長を考へなければならなかつた。それが大陸の諸國に弘く行はれた金色の卵から、先祖が生れたといふ物語の根本の動機であり、降つては瓠に乘り又はうつぼ舟に閉籠められて、海の彼方から漂著したといふ言ひ傳へとなつたことは、大抵は疑ひが無いのであるが、我國自身に於てもかぐや姫は竹の節の中に、光り耀いて居て竹取の翁に見出され、伊勢の齋宮の第一世

は、玉蟲の如き形をして貴き小箱の中に姿を現じたまふとさへ傳へられる。古くも新しくも似たる例はなほ多いのであつて、異なる點はたゞ童話として今の世までも、もてはやされるに至らなかつたといふのみである。我々の目から見れば、强ひて此樣な話にして愈ゝ實際から遠ざからしめるにも及ばぬやうなものだが、昔話を學ばうとした昔の人の要求は、寧ろさうして貰はぬと身にしみて古傳を受入れることが出來なかつた。具體的にいへば桃から生れた桃太郎で無いと、鬼が島を攻めて金銀珊瑚綾錦を、持つて還り得るとは信じられず、さうして彼等は何とかしてそれを信じて見たかつたのである。

人が文學は作り物であることを承認し、自由自在に幻想の翼をひろげて、空をかけれかしと念ずるやうになつてからも、なほ笑止なほど人間の巧みは地に著いて居た。それは恐らくは餘りに年久しい約束であつた爲で、どんな頓狂なるローマンスの中にも、時代々々の讀者の意識に於ては、有りさうな事といふ條件があつた。肉でも野菜でも鹽を附けぬと食べなかつたやうに、單なる幸福の夢は、幸福としては認められなかつた。わけも理由も無い致富成功勝利の類は、實際御互ひの如き利己主義の自由人にも、あまり頼りが無くて空想すること

が出來ない。況んや其中から共同の眞理を見出し、後日の計畫に參考しようとして、人の話を大切にして居た者が、其說明を求めずには濟まされなかつた筈である、畫や彫刻が幾らでも變化し、幾らでも自由に成長して行く割合に、物語にはいつでも背後の經過を、點檢せられるやうな弱味があつて、それが明白に書き添へられると否とを問はず、永い間ある定まつた趣向の中から、逸出し得なかつた理由は此邊に見出される。つまりは文人も亦昔話を聽く兒であつたのである。

獨り御伽噺のみが外形の奇によつて、僅かに新味を添へようとしたことを責めることは出來ぬ。三十年間の古書翻刻を以てして、なほ片端しか拾ひ上げられぬ程の近世文學ではあるが、その面白味の要點は、古い〳〵四種か五種かの解說に括られて居る。即ち數千年の昔から、人がさもありなんと思つて居た事情から、自然に導き得る生活の些々たる變化、それがたゞ蒐集家のやうな樂しみを、見物に與へただけである。人のよくいふのは親のかたきと、御寶物の紛失、若君の守り立てと本領安堵、斯ういふ幾つかを封じてしまへば江戸文學などは春の淡雪だが、自分は今更そんな皮肉を弄するので無い。それよりも一つ水上に溯つて、

例へば或主人公の非凡の生れつき、當世には時として遺傳など〳〵いふ語を使ふもの、古くは身の運といひ前生の因緣とも謂つたものが、普通人とちがつた境遇と業蹟とを附與することは是が一つ、神代卷では大國主命がその著しい例であり、中世に入つては牛若・辨慶・朝比奈等萬人の環視する英雄には必ずその生存の特別理由がある。美しい長者の一人娘が、信心の申し兒であつたのみならず、極惡の盜賊自來也天竺德兵衞の輩に至るまで、素性を床しがられ法術を歎賞せられ、假に誕生の奇が無ければ强ひても前生の超凡を推測しようとする。これ等は悉く皆桃太郎の桃であつて、至つて天分の貧しいと謂はる〳〵蒙昧民族まで、一貫してこれを昔話の骨子の一つとして居るのである。其眞似だと敎へたらいやがつて中止したであらうが、現代の文學に至るまで、滔々として先づ著想を此點に求めて居たのである。

第二に顯著なのは所謂善玉惡玉觀、忠臣藏でいふと石堂藥師寺の二つの顏を以て、舞臺面を彩色しようとする心持である。一人の奇拔な善人又は名士を、本當に讃歎しようとすればコントラストが入用になる。最初人類が高く力ある者を意識して其恩惠に信賴しようとした時代には、この階級又は表裏の差は殊に容易ならざる實驗であつた故に、日本でいふならば

富士と筑波の昔話、もしくは蘇民將來巨旦將來の兄弟が、一方は信心にして愛せられ、他は倨傲にして滅されたといふ話などが、深い愼みを以て聽かされたことは確かだが、是を一切の二人掠助譚の根源と見ることは不可能である。日と月・朝と夜との原始的な經驗が、物には二通りがあることを覺らしめることは簡易である。之を我々の善惡正邪まで持つて來るには手數を要するが、右か左か前か後かといふ對立は、寧ろ心の動搖の最もうぶな形と謂つてもよい。日本でもある時代には、神の職分を二つに分けて、力のほゞ均しいそれ〴〵の管理者を認めて居たことがあり、耶蘇敎の國でも魔神の親方に、祈れば祈られる程の高い力を認めたことがあつた。人間の運勢が一人每に區々であり、孔子と盜跖と相隣して住むこともあるのを見て、ある二つの結果に二つの原因を考へ始めたのも、言はゞ根柢ある進歩であつた。昔話の世界では舌切雀の爺と嫗、もしくは花咲爺の隣同士、猿と蟹(猿と蟇ともいふ)などの性質所業の相異を考へて見ても、是が未知の法則の手輕なる解說となり、次第に人を促して宗敎によつて其行爲を批判せしめた、因緣を爲したことは推察せられる。卽ち人は徒らに幸不幸ならず、之を求むるにはおのづから方法のあることを、斯うして發明して來たのが昔話の手柄であつた。それが偶然かはた又最初からの計畫であつたかは、別に今一歩を進めた後の問題として、兎に角に是だから昔話は、是非とも若い者に聽かせて置かうと、思つた時代は確かにあつたのだ。

笑話零落

世には江戸小說家の所謂勸善懲惡のみを目の敵にして、わざと反抗的に善人滅び、惡人末榮えて目出たからずの趣向を以て、自得しようとした一流もあつたが、是とてもやはり少しでも新しくは無かつた。そんな皮肉こそは昔の人は持たなかつたけれども、必ずしも後世の社會倫理を豫想して、それによつて昔話を統括しようとはしなかつた。超凡特殊の運命の寵兒は別として、只の人間の福を得、福を失ふ理由には、選擇すべき二通りの途があることを認め、單にその相異を指示するに專らであつて、正しい正しくないの標準は時代と共に移つて居た。さうして色々の時代の型が今もまだ錯綜して殘つて居るのである。大體から見ると

活きる道は一つ、之に背いた者の失敗は當然だとして、やゝ現代の感情から見れば殘酷だと思ふ程、瘤を二つにされた老爺の方を嘲つて居た。醒睡笑の中でも田九郎旦九郎の兄弟、一方が利口で他方は頭を打たれる。師匠と弟子の世界共通の笑話に於ても、狡猾横著なる一方の成功を、何の斟酌も無く賞翫して居るのは、目的が譎詐の便益を說くに在つたからで、例へば伊呂波歌留多を教訓などゝ名づけても、あの中には小兒の無理解を仕合せとしなければならぬやうなものが、隨分交つて居るのと同じことで、實際戰はねばならぬ相手が居たのだから、戰ふには戰ふやうな方法を教へたといふに過ぎぬ。

自分は曾て笑ひの根源を論じて、それが智力の勝負に於ける敗者を嘲るの聲から出たものでは無からうかと言つた。人間が素朴で敵も狩獵の獲物も、細かく區別をし得なかつた時代には、勝つた歡びは至つて單一且つ强烈なものであつたらう。腕力以外に色々な謀計を用ゐ始めると、其成功の誇らしさよりも、相手が意外に驚き自分のみ兼て知つて居たといふ懸隔が、必ず愉快なる高笑ひと之を說明する談話とを殘したと思ふ。現今我々が可笑しいといふ事柄の中では、之より古いものは一寸想像し得られない。其他は秘密の暴露にもせよ、又誤解の發見にもせよ、元は笑ひに化する迄の込入つた狀態は存在しなかつた。それから今一つの時代の變化は、昔は自ら辱めて人の笑ひを買ふといふ風が無く、笑ふ爲には特に笑はせる專門の奴隷を養はねばならなかつた。仲間友人同士では笑ふことは許し難い侵略であつた故に、たまゝ〳〵敵人の笑ふべき者を見出した場合には、遠慮會釋なく歡呼したので、勝鬨もこの共同の高笑ひの形式化したものであらうと思ふ。

平和が部落間に確立したといふのは、單に械仗を執つて相毆たぬことを意味し、進んで譎詐を交換せぬ迄も、退いて互ひに相欺いたことは、つい近頃までの實狀であつた。乃ち嘲弄と戲謔とは彼等の消極的敵對方法として、武藝の他流試合ひ以上に發達しなければならなかつたので、笑話の大宗たる「おろか村」の物語も、能く天狗退治や狐狸失敗の奇談と共に、何等の弊害なく夜話の席を賑はし得たのであつた。面白いことには嫁聟・奉公人・分家・新田・野山入會の沙汰が起るに及んで、右の所謂おろか村は段々に山家奥在所のどん底まで押詰められた。それが物足らなくなると今度は馬鹿聟が笑はれる。聟は人間の最も肩身の狹い者で、通例村の娘を一人盜んだ程に憎まれて居た。しかし分限者の聟殿ならば、さうも馬鹿にならぬ

ぬから、次には人のよい怒りさうにも無い者を捜す、其内には又自ら風狂を以て任ずる異常人物、諸侯家でいふなら咄の衆に該當する者が、志願して滑稽の題材になつた。是が我々の彦八又はウソつき彌二郎で、少し繁昌の村ならいつも其一人を缺かなかつた。

昔話の本意からいふと、此方面には特に衰頽の跡が目に著いた。純なる笑ひは主として人間相互の交渉に根をさすから、其關係にして變化すれば、勢ひ古い形のものを保有することを得なかつたのである。人が一旦このやゝ殘酷なる快樂を味ふと、それを制限して他の比較的平穩なるものに向はしめることは、無器用な村人にはさう容易でなかつた。勿論其一部分は、依然として敵なる動物や妖怪の群に轉嫁し、又若干は偶然の誤解、即ち雙方落度無しの衝突などに取換へたが、他の大部分は一段と下劣なる男女の私事を採つて、强ひて笑ひたがる欲望に充てたのである。勿論是とても古くから存在する一種であつたが、元來は祭の前後の一定の日、特殊の興奮の用に供せられて居た。それを日常のものとして田舍の羞恥心を一變させたことは、悲しむべき滑稽道の墮落であつた。童話の聽衆が敵を憎むの術を忘れたのは、大いなる恩惠には相違ないが、是と同時に彼等の必要とせぬ色々の知識は加はつた。對價としては可なり高いものであつた。

話術と滑稽

西洋の學者の中には、笑話は昔話として一番遲く發達したものだといふ人がある。さうかも知らぬが是は決して近世の事實を指したものではあるまい。人類の笑ひを知らず、笑ひを悅ばなかつた時代は想像することが出來ぬからである。只我々の笑ひ得る場合は、以前は可なりの制限を受けて居た。それが今日の村の娘たちの如く、始終笑つて居るやうな世の中になる迄には、隨分大きな變遷があつたのである。先づ第一に笑ひは癖になり、案外な處まで浸潤して行くものでは無からうか。曾て大いに笑つたことのある者は、其原因が絕えてから後も、尙時々は笑ふことが無いとつまらなくて仕方が無いものらしい。心理學者の事業として、是は行く〳〵是非測定すべきものだが、同じ一つの民族の中でも、地方によつて著しく笑ひの分量の多少がある。獨り英人が笑はぬとか佛人がよく笑ふとか、大別してしまふこと

は出來ぬやうである。個人又は家庭によつて此差異の餘りに著しいものがあるのは、何か社會的原因であらうと思ふ。日本に咄の衆といふ者が出來て、御伽といふ語を昔話の代りの名にしたのは、記錄は勿論其他の史料を求めても、足利時代より古い證據は無い。今昔物語の常常の話などを始めとして、人が笑はれたといふ話は次々に殘り、著聞集には興言利口の一篇まで設けられてはあるが、それを供給する職業の者が、果してもう存在して居るだらうかどうか。しかも物狂ひの歌舞が祭の日でも無いのに催され、もしくは時とも無くミキを飲む人が出來た如く、時々は强ひて笑ひの話を聽いて、宥りし日の興を追はうとする風が盛んになり、從うて平生之を用意して居る者が、追々に歡迎せられるやうになつたのかと思ふ。斯うなるとどうしても笑話は獨立して發達しなければならぬ。以前の滑稽の一種にはまだ我々には呑込めぬ物眞似といふものがあつた。是も元來は山の反響を妖精と解したやうに、必ず敵意を含んだ應答であつたらうと思ふに拘らず、不思議に嚴肅なる儀式のすぐ後で、之を模倣して參列者を笑はせて居たのである。即ち一つのしぐさ、一つの唱へ言には、必ず正しいものと之を似せたものとが重ねられて居た。どうしてさうするかは才藏や大神樂の狂言方などの、自身之に與る者にももう解らないが、兎に角に元はチャリばかり孤立しては行かなかつた。それが追々に本格と離れて價値を持つことになつたのは、單なる信心の破綻以外、別に新たなる理由があつたらしいのである。

自分は沙石集の愛讀者であるが、此法師の物語の中にも、彼が天性の洒落から出たとばかり考へられぬ滑稽が多い。即ち世を慨した熱烈なる說法である爲に、特に其間に若干の惡謔を交へて置く必要が、彼の時代には認められて居たのでは無いかと思ふが、しかもその可笑味は最早田樂などのモドキでは無かつたのである。此書は後代俗間の說敎師が、參考書として非常に珍重したものだか、それには少々似つかはしくないと思ふ程、生臭坊主を漫罵した個條が多い。何しにそんな事を書くかと訝るやうであるが、考へて見ると是は空也と市人と共に踊躍した如く、主としては話に導かれんとする聽衆の要求であつた。斯うして笑ひくつろいだ心持にならぬと、彼等の感動は新たに貴いものを受入れることが出來なかつたのである。恐らく此民族の宗敎は、夙くよりそんな特性を具へて居た。所謂念佛法門の傳道は、初めて斯ういふ群の活動を開いたので無いばかりか、必ずしも研究して十分に之を利用したと

も言はれないのである。

現代の落語まで續いて來た坊樣の滑稽談、下手な說敎に泣き比丘尼を傭うて來たといふ類の話、それから小慧しい小僧に遣り込められたといふ色々の失敗話の如き、之を法師に反感を持つ社會の產物と見ることは、どうも歷史には合はぬやうに思ふ。多分は沙石集も同樣に法話を話らしくする爲に、努力して合ひの手に人を興ぜしめて居たものが、氣の毒にも肝腎の敎はどこへか散つてしまつて、切り離されたクワンクワンや三串八串の團子の話ばかり、爺婆の昔語りの中に傳はつたのであらう。尤も後々は斯ういふことばかり得意にしやべる者が、談義坊主として現はれて來たかも知らず、生活の爲には段々の濫用もあつたらう。前に引用した醒睡笑の編者なども、序文を見れば誓願寺の隱居上人、安樂菴策傳であつた。誓願寺は京では有數の念佛道場であるが、そこから出たと稱する諸國遍歷者は、かたの如き賣僧であつたらしい。それが持つてあるいて居た歌物語の類は、どれがどれやらもう不明になつて、本山の方には却つて是だけの數の笑話のみが保存せられ、其中にはもう澤山の坊主を嘲つたものが入つて居るのである。

琵琶法師を題材とした笑話やからかひの歌も相應に多い。亦同樣に彼徒の自作であらうと思ふ。平家は如何にも物悲しい語り物であるが、座頭に隨從する小盲は、跡で必ず口直しのやうに、腹を抱へさせるやうな早物語をした。東北地方で大家といふ程の家は、臺所が馬鹿に大きくて、始終色々の旅の者が泊つて居た。ボサマなどは殊に人氣があつて、藝と話で夜は遲くまで遊ぶのが習ひであつた。常居の爐の周りにも、一冬は每夜のやうに夜話の寄合があつた。後には單なる閑潰しの如く、考へられるやうになつたらしいが、實は是も亦缺くべからざる年中行事であつた。殊に近世の三百年を一貫して、日待といひ庚申待といふが如き、殆と夜話を主たる目的とした會合が當番を以て催され、必ず其席に招かれる者は座頭であつた。座頭といふ名稱も或は斯ういふ處から出たかと思ふ。舊家には持佛の前などに盲人を泊める小座敷さへもあつた。奧州の昔話の今日の形は、思ふに此一間の中で改造せられたものであらう。といふわけは此階級の宗敎上の勢力は、他の何れの法師よりも一番先に失墜して、直接技藝を以て飯の種としなければならなかつたからである。

但し是は固より昔話の供給が、必ず盲の琵琶彈き等の片手わざであつたといふので無い。

彼等が骨折つたのは新しい話の種の蒐集と修整利用で、それが聽手の期待に反せざる限り、是非とも純粹であり又眞實であることを念としなかつた故に、一時非常に其數を豐富にしたことは事實であるが、家々の祭の夜に昔々を語るといふ慣例は、新たに彼等から始まつたわけでも無く、他にも色々の旅の宗教家が、各特徴ある語り口を以て、次々に新しい形の昔話を增加したことは、一部の今日に傳はつた記錄だけからでも、之を證明することはさまでの難事で無い。例へば盲人とは緣の無い仕方話、舞や繪解きの眼の印象に手傳つてもらつたものは、おのづから其相違が久しい傳承の間にも痕を留める。少しく練習を積めば混合の間からでも、選り分けて見ることが出來ると思ふ。

落語は或は盲人の昔話から、系統を引いたものかと思ふがどうであらうか。下品で信心氣が無くて題目が陽氣で、强ひて說き方ををかしくしようとする點は、少なくとも兩者に共通である。仙臺の方言では昔話をザットムカシ、越後の蒲原地方では、アッタテンガノニと謂ふ。共に此一句を以て後々迄も、小兒の昔話が始められたからである。斯んな形式を固定したのも、座頭の黃色な作り聲の力であらうが、それが又トントムカシと同樣に、千年來の一大條件に、丸々背き得なかつた面白い證據である。佛蘭西などの昔話には聽手の坐睡を防ぐべく、中程にも時々挾む定文句があつたといふが、我々の中にもあつたか否か、まだ確かめて見ることが出來ない。最後の文句にも亦古くからの定型がある。東京などではソレデオシマヒ。古風な話し方ではソレデイチガサカエタ。越後では之を一つくねつて、エッチガサッカエボロントモゲタと謂ふさうだ。奧州南部ではソレデドンドハレ。富山附近ではカタッテモカタライヂモ候。秋田では又ハイモノガタリカタリ候と謂つたらしい。「市が榮える」とは如何にも意味ありげな言葉だが、どうしてさういふことになつたかははつきりせぬ。子供の用に供するに至つて、色々滑稽に言ひかへたかと思はれるが、何等かの定まつた文言を附けることだけは、なほ成人の昔話からの引繼ぎであつた。今昔物語の卷二十八、銀鍛冶延正華山院の勘當を蒙る話に、延正御殿の端に出て大聲に事の顚末を述べ、其末に「此事聞きたもてやヲイ」と叫んだと記して居る。院聞し召し、此奴痛く申したる物云ひにこそ有けれと仰せられたとあるから、あの時代の物云ひ卽ち話をする者は、末の一句としてこんなことを唱へたのである。それが上古の歌物語の、「事のかたりことともコヲバ」と同じ趣旨なることは想

像し得られる。要するに昔話は後代に記憶せられんが爲に、特に形を整へて敍述する說話であつて、其點は恐らく今一つ以前の、正式なる神話も同樣であつたらう。それが今日幼兒の間にばかり幽かに殘つて居るのは、彼等の所望といふよりも、寧ろ彼等以外には聞き保つ人が無くなつた爲で、元は古い物を斯うして子供等に引渡す代りには、大人にも追々新らしい昔話が補給せられたものだが、今ではそれも絶えて、傳統はたゞこの一縷の絲に繫がつて居るのみである。

（日本文學講座、昭和三年四月）

（出版文化協會承認ア360206號）

昭和十八年四月五日　初版印刷
昭和十八年四月十日　初版發行
（五〇〇〇部）

昔話覺書
定價　二圓

著者　柳田國男
發行者　東京市神田區神保町一丁目一番地　株式會社三省堂　代表者　龜井豐治
印刷者　東京市赤坂區青山南町二ノ一六　愛光堂印刷社　代表者　岩本米次郎　會員番號　東東第一八五號
發行所　東京市神田區神保町一丁目一番地　大阪市西區阿波座下通二丁目六番地　株式會社三省堂　振替東京三一五五五番　會員番號一一一五〇一號
配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

波多野完治著　フールス判・400頁・函入
改訂増補 文章心理學　日本語の表現價値　定價 3.00　送料 .15

波多野完治著　A5判・344頁・函入
文章心理學の問題　定價 3.30　送料 .15

波多野完治著　B6判・204頁
文章心理學入門　定價 1.20　送料 .12

高岡高商教授 大能信行著（品切）　フールス判・240頁・函入
文藝の日本的形態　定價 1.50　送料 .12

有坂秀世著　A5判・344頁・函入
音韻論　定價 3.50　送料 .15

魚返善雄著　四六判・274頁・函入
大陸の言語と文學　定價 2.20　送料 .12

小林英夫著　B6判・440頁
文體雜記　定價 3.00　送料 .20

三省堂刊

H—222

小西甚一著　日本出版文化協會推薦
梁・塵秘抄考
A5判本製・六七六頁函入
定價 八・〇〇　送料・二二

本書は後白河法皇の御撰になる法門その他を主題とした短歌體催馬樂・今様體等の歌集類集「梁塵秘抄」に關する基礎的な研究である。第一部に於てその本文的性質及び歴史的特質についての研究を收め、第二部に於て本文の校訂及び謹解を掲げて、本原著のもつ特質及び價値を學術的且組織的に闡明した。國文學の精髄を方法論的に究明した見遁し難い我國最初の研究文獻である。

三省堂刊

H—224

國文學評傳の權威書

各册B6判　約三〇〇頁　送料各・二〇

清少納言	闕みさを著	二・〇〇	河村秀根	阿部秋生著	二・〇〇	香川景樹	實方清著	二・〇〇	顯昭・寂蓮	久曾神昇著	二・五〇
橘成季	中島悅次著		阿佛尼	小川壽一著		吉田兼好	白石大二著		金春彈竹	阪口玄章著	
慈圓	筑土鈴寛著	二・五〇	正徹論	兒山敬一著	二・〇〇	富士谷御杖	三宅清著	二・〇〇	小林一茶	伊藤正雄著	二・五〇
宗祇	井本農一著		與謝蕪村	土方定一著		平賀元義	柴生田稔著		國木田獨歩	坂本浩著	
小野小町	前田善子著		芥川龍之介	吉田精一著							

三省堂刊

H—250

953
160